第一章　　インドネシアにおける社会変容と言語綴りの変遷

はじめに

現在インドネシア共和国の国語となっているインドネシア語は固有の文字を有しておらず、イスラームの普及以降ポルトガル、イギリス、オランダ来航までアラビア文字に多少手を加えたジャウィ文字が使用されていた。しかし次第に支配権を拡大して行ったオランダ人は貿易や植民地政策遂行上ローマ字を導入し始め、マレー語の辞書や文法書等も 17 世紀初頭より彼らの手で作成されることとなった。

それと同時に文字もジャウィ文字からローマ字に置き換えることになるが、これが容易な作業ではなかった。促音、濁音、母音などの表記が個人個人で異なり、同じ単語でも異なる表記となり、オランダ人、インドネシア人が個々に綴りの作成に着手した。しかし民衆にこれらの綴りが普及するには時間を要した。このような状況で独立を迎えることとなる。[1]

言語形成の三大重要事項は綴り，用語、文法[2]であり、植民地時代から問題となっていた綴りの問題は、インドネシア語を国語として整備する中でも最重要事項であった。[3]またインドネシア語を近代語として成立させるためにも、綴りの統一が急務であった。綴りの統一に始まるインドネシア語発展のための活動に伴う三大必須要因は、オランダの言語学者であるA.トゥーウによると次のとおりである。（トゥーウ、1961）

１．　国家の安定。

２．　教育。教員の質的向上、教材の改良、尊厳の向上により実現。

３．　コミュニケーション。書籍、ラジオ、テレビ、文化人、文学者、言語専門家、教員のマレー語圏内での相互交換は、マレー語が世界語になる成長プロセスの絶対条件。

本章ではインドネシア語の発展にとっての三大重要事項の１つである綴りの変遷と共に上記三大必須要因についても検証を行う。

第一節　　インドネシア語[4]綴りの誕生

紀元前十五世紀頃今日のタイ南部からマレー人、ジャワ人等の祖先が南下しほぼ紀元前200 年頃現在のような民族分布になった。マレー人はスマトラを中心に定着し、7 世紀にはスマトラのパレンバンにスリウィジャヤ王国を築いている。当時スリウィジャヤは中国からインドへ仏教を学びに行く僧侶達の中継地点でもあり、サンスクリット語の影響を受け、インドのパッラワ王国の経典文字であるグランタ文字（通称パッラワ文字）を使用していた。パッラワ文字で書かれた古代マレー語の石碑（最初のものはパレンバンの Kedukan Bukit で 683 年）の発見によりこれが明らかとなった。マレー商人が商売のためにスマトラ、ジャワ、カリマンタン、スラウェシ島をはじめとする島々、特に各地の港市国家を巡り、マレー語文法が単純で受け入れられやすいこともあり、沿岸部を中心に広範な地域に広まった。マラッカ海峡を中心とした現在のマレー語圏の地域と貿易をするインド、中国、アラビア商人も交易を円滑にするためマレー語を*リンガフランカ*として使用することとなる。7 世紀を頂点にスリウィジャヤ王国の勢力の拡大と共にインドネシア語使用領域も広まっていった。

図１　マジャパイト王国時代の交易路

（*IPS, Sejarah Nasional Indonesia* に基づき筆者作成）

14 世紀のマジャパイト王国の繁栄期にはジャワ島東海岸沿いのトゥバン、グレシック、スラバヤなどがジャワ島の主要な交易港となった。上記はアラブ人、インド人、中国人商人の交易路である。

アラビア商人の増加と彼らの宗教であるイスラームが伝播したことにより 13 世紀に入ると北スマトラ北端のアチェからイスラーム化が始まり、次第にヒンドゥ教、仏教に取って代わっていった。これに伴いそれ以前に使われていたパッラワ文字からアラビア文字へと移行した。マレー半島東岸のトレンガヌのテレサット川沿いでアラビア文字によるマレー語の石碑（1303 年）が発見され、アチェではパッラワ文字による石碑（1380 年）が発見されていることから、パッラワ文字とアラビア文字が同時に使用されていた期間が 80 年ほどあることが明らかとなっている。マレー語の **tj**，**nj**，**g**，**ng**，**p** の音がアラビア文字では表記できないため、本来のアラビア文字に新しい符号を付け上記の音を表現した。これをジャウィ文字といい、1300 年代から第２次世界大戦まで宗教、商業分野で使用されていた。

1511 年にはポルトガルがマラッカ王国（アユタヤ王国から独立した 1445 年頃成立）を占領し、西欧人による植民地化が始まる。その後イギリスは 1786 年ペナン島に上陸し、マレー半島を中心に、またオランダは 16 世紀末に現在のジャカルタに商館を置き、1602 年にはオランダ東インド会社が設立され、次第にインドネシアの港市と航路を支配することとなる。1824 年に英蘭条約が締結され、イギリスが現在のマレーシア領域、シンガポールおよびインドを、オランダがほぼ現在のインドネシア領域を支配下に置くことになり、これ以降同一の言語、マレー語が基本的には同一構造を持ちながらもマレー半島では英語の影響を受けマレーシア語[5]（当時の名称はマレー語）、インドネシアではオランダ語やジャワ語の影響を受けインドネシア語と、異なる言語としてそれぞれの道を歩んでいった。

オランダ人は植民地経営の必要上インドネシア語を学び、フレドリッヒ・デ・ハウトマンが 1608 年にマレー語・マダガスカル語辞書（*Spraeck en Woord－boek inde Maleysche ende Madagaskarsche Talen met vele Arabische ende Turesche Woorden*）を作成した。これがマレー語では最古の辞書と言われている。1623 年にはキャスパー・ウィルテンズとセバスティアヌス・ダンカート共著のドイツ－マレー語、マレー語－ドイツ語辞書（*Vocabularium Ofte Woordboek naar order van den alphabet in Duytsch－Maleysch ende Maleysche－Duytsch*）が出版されている。これより前の 1522 年にはマゼランの世界周航に同行したイタリア人ピガフェッタがイスラム教徒が使用する単語集（*Vocabuli de*

Questi Populi mori）を作成しているが、語数も少なくこれはあくまで単語集としての域を出るものではない。[6]また音として耳から入ったものをローマ字で記したもので、言語学的法則はない。

例：	ピガフェッタ	現在のインドネシア語
	alla	Allah （アラー）
	anach	anak （子供）
	poran poan	perempuan （女性）
	tanghan	tangan （手）
	salibu	seribu （千）
	mischit	mesjid （回教寺院）
	matta	mata （眼）

ついで上述のハウトマン、ウィルテンズらの辞書を改善した形で 1653 年にはオランダ人ヨハネス・ロマンがマレー語辞典（*Grondt ofte Kort Bericht van de Maleysche Tale* ）を編纂し、20 年後の 1674 年に出版している。

例：	ヨハネス・ロマン	現在のインドネシア語
	elmou	ilmu （学問）
	kolouar	keluar （出る）
	ponja roema	punya rumah （家主）
	ketʃiil	kecil （小さい）

上記の単語集、辞書はジャウィ文字ではなく、西欧人が分かり易いようローマ字で表記されている。しかしながらこれらは全て彼らが耳から聞いた音をそのまま自国語の綴り法に合わせ表記したものであり、同一の単語でも辞書により表記方法がまちまちであった。その上各地方で使用されているインドネシア語はその固有の方言や訛りが入り、異なった発音で通用しているため、どの地方のインドネシア語を基本にしたかにより辞書の内容が異なっていた。しかしオランダはインドネシア語綴りの統一を図ることはなかった。

1901 年からオランダの倫理政策によりオランダ植民地政府は、学問、調査、文化、宗教面でのコミュニケーションを円滑にするためにインドネシア語の綴りの統一を図り、同年に Ch. A. ファン・オップハイゼンが中心となりアルファベットによる統一綴りを作成し

た。

第二節　インドネシア語綴りと社会状況

インドネシア語の綴りは、概念的なものと制度的なものに分類される。[7]概念的綴りとは実際に新綴りが作成されたが実用的ではない、あるいは1960年代の「マレーシア対決」など政治的な理由などで概念に止まり、実際には使用されなかった綴りである。一方制度的な綴りとは実用化された綴りのことである。

インドネシアで最初のローマ字表記の正式な綴りは上述したようにファン・オップハイゼンのものと言われているが、概念的なものは1897年のA.A.フォッカーから始まっている。フォッカーは英領マラヤと蘭領東インドで使用されているマレー語の綴りを統一し、英領、蘭領の共通綴りを作成しようと試みた。しかしながらこれは概念に止まり実施されることはなかった。

２．１．　綴りにおけるオランダの影響　－　ファン・オップハイゼン綴り

1855年W．ロビンソンがヨーロッパで初めてマレー語をジャウィ文字で記した本を出版した[8]。このマレー語のジャウィ文字表記に対しピナペルは1860年に反対した。1865年にはオランダ植民地政府はインドネシア語をオランダ語に次ぐ第2の公用語として認めた。1882年ファン・オップハイゼンはジャウィ語表記に対し中立を表明し、1895年にはフォッカーとオランダの言語学者C.スパットが音声論に基づいた綴りを紹介した。そして第一節で既述したように1901年ローマ字によるマレー語文法書:マレー語単語集（*Kitab Logat Melajoe : Woordenlijst voor de Spelling der Maleische Taal met Latijnsche Karakter*）でファン・オップハイゼン綴りを発表した。これがインドネシアで初めての綴りの統一であり、インドネシアにおけるローマ字による綴りの歴史はオップハイゼンから始まったと言えよう。これにより蘭領東インドにおけるインドネシア語の綴りの統一が図られた。1908年9月14日設立のCommissie voor Volkslectuur（後のバライ・プスタカ）から出版された著作には、全てこのオップハイゼン綴りが使用された。

以下がオップハイゼン綴りである。

ファン・オップハイゼン綴り：

1. a koeda, senang, bahasa
2. ai pakai, pakaian
3. au poelau, saudagar
4. b baroe, sebab, wadjib
5. ch chabar, tachta
6. d dari, maksoed,
7. dj djari, djoeadah
8. e emas, empat, pernah
9. é élok, lémpar
10. f fasal, ma'af, mafhoem
11. g gantoeng, magrib, balig
12. h hari, pahit, sahoet
13. i ikan, wadjib, sisa
14. j jakin, sahadja
15. k kami, paksa, kebanjakan
16. ' ta', ta'kan, moe'min
17. ‘ ‘adat, sjara‘
18 l lari, lahir, tinggal
19. m mari, minoem
20. n nenas, tandan, pandjang
21. ng nganga, angkat, wang
22. nj njawa, tanja, banjak
23. o bohong, onggok
24. oe oetang, loear, pengetahoean
25. p padi, tetap, pikir
26. r ramai, bersih, ralat
27. s soerat, poetoes, sabar
28. sj sjéch, masjhoer
29. t tali, angkat, talak

30. **tj** tjari, botjor

31. **w** wang, wali, sawah

32. **z** zaman, izin, zikir

オップハイゼン綴りの長所は、①音節表記のアラビア文字から音声表記のローマ字になった。②簡単なローマ字表記によるインドネシア語は20世紀初頭、特にバライ・プスタカ時代にインドネシア各地に急速に普及した。③オランダ植民地政府はこの綴り使用によりインドネシア人および外国人商人たちとのコミュニケーションが円滑になり、多大な経済的利益を収めた。④ローマ字による民話、文法書などの出版で地方語も急速に普及、発展した。

一方下記のような短所も存在した。①オランダ語の綴りの影響を受け、本来の音をローマ字表記できずインドネシア語らしさが失われた。②ain, hamzah, z, f,ch, sl, ts など、インドネシア語にない外国の音素を使用している。

オップハイゼン綴り作成に当たってはウンク・マワウィ・スタン・マクムルおよびムハマッド・タイブ・スタン・イブラヒムが力を尽くしている。[9]しかしながら[u]の音を**oe**と表記（例：guru－goeroe 教師）し、[y]の音は j で表記（例：saya－saja私）するなどオランダ語綴りをそのままインドネシア語にも適用している。この他にも１音を２文字で表記（例：**c→tj**: cari → tjari 探す, **j→dj**: jalan → djalan 道）や‘、’、等の符号（例：ra‘yat、ma ’af、）が導入され非合理的であるとインドネシア人知識層からの不満が高まっていった。1918年オランダ植民地政府は国民参議会（Dewan Rakyat）を設立し、アグス・サリン・アミル,モハマッド・ヤミンなど、インドネシア人も議員として加わった。彼らはマレー語を国民参議会の会議中使用し、1918年にオランダ女王がインドネシア語の使用を承認しかつオランダ語と同等の地位を与えた。第一回インドネシア青年会議が 1926 年 4 月 30 日から 5 月 2 日までバタビア（現ジャカルタ）で開催され、そこでモハマド・ヤミンは言語問題を取り上げ「未来のインドネシア語と文学の可能性」というテーマでインドネシアの各エスニック・グループ間の言語の統一について語った。本会議でもインドネシア語が一部使用された。これが刺激となって二年後の1928年10月28日にジャカルタで開催された第２回インドネシア青年会議において「青年の誓い」が採択された。その内容は「我が祖国は一つ、すなわちインドネシア国、我が民族は一つ、すなわちインドネシア民族、我が言語は一つ、すなわちインドネシア語[10]」というものであり、この時「マレー

語」ではなく「インドネシア語」という言葉を初めてインドネシア民族の言語として用いた。そしてほとんどの参加者がインドネシア語を使用した。

彼らはオランダ人の手によるものでなく、インドネシア人自身による、より合理的なインドネシア語綴りを作成したいと熱望していた。そして、1938 年第 1 回インドネシア語会議がジャワのソロで開かれ、そこでキ・ハジャル・デワントロ[11]が「インドネシア語と名づけられたものは、すなわちリオウ・マレー起源のマレー語であるが、すでに新しい時代の要求により変化し、その言語はインドネシア全土の国民に使用されるようになった。マレー語の改新は新しい現状の中で生きている人々により行われインドネシア語となった」と述べた。[12]そして当時使用されていたインドネシア語の言語としての近代性の確立を目指し、見直しが提案された。インドネシア語を使用した文学も盛んになり始め、アンカタン・バライ・プスタカ（Angkatan Balai Pustaka、バライプスタカ世代）、アンカタン・プジャンガ・バル（ Angkatan Poedjangga Baroe、新詩人世代）、 アンカタン‘45（Angkatan ’45、45 年世代）、アンカタン’66（ Angkatan ’66、66 年世代）といわれる文学時代の作家が誕生した。

バライプスタカ世代とはオランダ植民地政府が 1917 年に図書の選定や出版を行う機関であるバライ・プスタカから作品を出版した作家たちを指す。代表作品はミラリ・シレガーの『重なる苦難』（*Azab dan Sengsara）*(1920)、 マラ・ルスリの『シティ・ヌルバヤ』（*Sitti Noerbaja）*（1922）、アブドゥル・ムイスの『西洋かぶれ－教育を誤って』（*Salah Asoehan）*(1928)などであり、近代文学の先駆をなす作品として評価を受けている。

新詩人世代とは植民地政府監視の下バライ・プスタカで物語を中心に発表することに作家らが不満を持ち始め、バライ・プスタカ出版の週刊誌『パンジ・プスタカ』（*Pandji Pustaka*）の編集長アリシャバナが 1933 年に「インドネシアの新文化、統一文化形成のためのダイナミックな新精神を指導する雑誌」として創刊した雑誌『プジャンガ・バル』（*Pudjangga Baroe*,1933 年－1942 年、1948 年－1953 年）で活躍した作家たちである。代表的作品はアリシャバナの『帆を上げて』、アルミン・パネの『桎梏』（Berenggu）、アミル・ハムザの詩集『寂唱』（Nyanyi　Sunyi）などである。

45 年世代とは戦前の知識層による選良の文学と異なり 1945 年以降に社会の生の実態を描く戦後文学を担った作家たちを指す。代表的作家はハイリル・アンワル、 イドルス、ウスマル・イスマイル、 プラムディア・アナンタ・トゥール、 アスルル・サニである。

66 年世代とは 1960 年代前半まで社会主義リアリズムに抑圧されており、その間沈黙を

強いられてきた自由な精神を取り戻した時代の作家たちで、政治社会的価値判断にたった文学世代である。政治理念においてパンチャ・シラ国家理念を遵奉し、独裁的政治に対する政治社会的抵抗を新しい表現様式、テーマで追求した。代表的作家はタウフィック・イスマイル、レンドラ、グナワン・モハマドなどである。

上記新詩人世代から 45 年世代へ移行する間の 1941 年 12 月 8 日に太平洋戦争（当時の呼称は大東亜戦争）が勃発し、翌 1942 年 3 月、日本軍がインドネシアを占領し、自由な文化活動は大幅に制限された。軍政当局は、まず最初にオランダ語を敵性言語として使用禁止し、全学校の閉鎖を行なった。その後、日本語を公用語としてインドネシア全土に普及させようとしたが失敗した。その結果、軍政当局は占領政策を円滑に遂行する為、インドネシア語をインドネシア全土の共通語にすべく、その普及活動を行なった。閉鎖していた学校の教育語をオランダ語あるいは地方語からインドネシア語に変えて再開し、オランダ植民地時代のオランダ語の教科書をインドネシア語に翻訳し学校で使用した。その他 1942 年 10 月 22 日にはインドネシア語整備委員会を設立し、当時の文学者や言語学者にインドネシア語の整備を依頼した。本委員会には知識階層の青年が集まり、日本軍の監視が厳重ではなかったので言語ばかりでなく、政治についても比較的自由な意見交換が行われた。ここで、S.T.アリシャバナらは文法を、スワンディらは綴りを整備していたが、戦時中にその決定はなく、戦後 1946 年、1947 年にアリシャバナの用語辞典が、1947 年にはスワンディ綴りが、1949 年、1950 年にはアリシャバナの新文法が出版、発表された。本委員会活動中にその内容を公表されることはなかったが、戦後その間の成果が実を結び独立後のインドネシア語発展に多大なる貢献をした。

２．２．独立直後のインドネシア人による綴り　－　スワンディ綴り／共和国綴り

1945 年 8 月 17 日にインドネシアは独立宣言を行ない、1945 年憲法第 15 章第 36 条にインドネシア語を国語とすることが定められた。しかしインドネシアの独立そのものを旧宗主国オランダが認めず、1949 年までの 4 年間独立戦争が各地で展開され、国内で混乱が続いた。1946 年には首都をジョクジャカルタに移転、翌 1947 年に当時教育文化相スワンディ（法律家）を長とするインドネシア語綴り委員会（Panitia Ejaan Bahasa Indonesia）が発足した。これが後に共和国綴り委員会（Panitia Ejaan Republik）として知られる委員会である。サムッド・サストロワルトヨら 3 名の言語学専門家が中心となり、新綴りの

作成を行なった。1947 年 3 月 19 日スワンディ教育文化相は大臣決定書第 264／Bhg.A 号をもってインドネシア語綴りの変更を発表した。ついで 4 月 15 日にその内容の一部を変更した決定書第 345/Bhg.A 号が出された。この綴りがスワンディ綴りあるいは共和国綴りとして後日知られる事となった。
スワンディ綴りはインドネシア語の綴りを全体的に再編したものではなく、ファン・オップハイゼン綴りを基にその一部を修正したものであり、その目的は綴りの簡素化であった。

スワンディ綴り：

1. a hawa, naskah
2. ai pakai, air
3. au kau, lampau
4. b batu lembab
5. d dari, abad
6. dj djuga, djandji
7. e emas, enak
8. g gelang, bedug
9. h tahun, tahan
10. i ia, hasil
11. j saja , jakin
12. k kami, anak
13. l lama lampau
14. m kamu, kolam
15. n tani, nikmat
16. ng telinga, lubang
17. nj njaman, anaknja
18. o olah, bohong
19. u guru, laut
20. p lupa, pasir
21. r baru, pasar
22. s bisa, balas

23. t satu, kuat

24. tj katjang, tjukur

25. w sewa, kawan

ファン・オップハイゼン綴りとスワンディ綴りの比較：

１．”a”で終わる単語に接尾辞”ï”が付く場合は、ファン・オップハイゼン綴りでは、¨を加えるが、スワンディ綴りでは¨は付けない。

例： dinamaï → dinamai

２．ファン・オップハイゼン綴りでは、e，é という表記により 2 音を区別していたが、スワンディ綴りでは区別せず、2 音とも”e” と表記した。

例： segar → segar　　boléh → boleh

３．”oe” をスワンディ綴りでは音に従い、”u” と表記した。

例： goeroe → guru

４．符号“’”を k に変えた。また“‘”は消去。

例： ra’jat → rakjat

‘ilmu → ilmu

５．単語を二回繰り返す場合、数字の 2 を使用することも可能とする。

例： berdjalan－djalan → berdjalan2 あるいは berdjalan－djalan

６．導入する外来語の中の半狭前舌母音 e は、スワンディ綴りでは入れない。

例： putera → putra

以上の 6 点がファン・オップハイゼン綴りとスワンディ綴りの基本的な相違点であり、他の部分はファン・オップハイゼン綴りとの変更点が無い。しかしながら、上記 6 点の改定点にもいくつかの問題が生じることになった。上記２．の場合、”e”と”é” の区別が無くなった為、例えば segar（新鮮）の発音が［sə̆gar］か［segar］であるか不明瞭になってしまう点である。

上記３．の場合、”oe” が”u”になる為、例えば laoet（海）が laut となり、二重母音の au であるか、 la-ut と別の音素になるのか区別できない。しかしながら一方で 2 文字が 1 文字となり、より簡素化されることになった。

上記４．の場合、アポストロフィ部分は促音であるにもかかわらず、例えば ta’ が tak になると［tak］とはっきり発音してしまい、元の［taʔ］とは異なる音になる。

上記６．の場合、元の外来語が例えばputera、putraのどちらであるか知らない場合、区別できない。

以上のように、スワンディ綴りに対し批判や不満も提起されていたが、対蘭独立戦争下という「非常事態」にあったことからこれらの不満は表面化しなかった。スワンディ綴りに対する不満が表面化するのは独立戦争に勝利し、1949年12月ハーグ円卓協定でインドネシア連邦共和国が形成、翌1950年に単一インドネシア共和国が誕生した後のことであった。具体的には1954年10月28日から北スマトラのメダンで開かれた第２回インドネシア語会議で、この問題が取り上げられることになった。[13]

２．３　言語綴りの脱植民地化　－　改新綴り

1938年に開かれた第一回インドネシア語会議に続き、第２回インドネシア語会議は、1954年10月28日から11月2日までメダンでモハマッド･ヤミン教育文化相の下で開催された。ここでは「インドネシア語の起源はマレー語である。インドネシア語の基礎はインドネシア社会の成長に合ったマレー語である」と解釈され、この中で綴りに関しては次の3項目が決定された。

１．綴りは可能な限り１音１文字にする。
２．綴りの研究および決定は政府により組織化された機関によりなされる事が望ましい。
３．綴りは合理的かつ学術的であることが望ましい。

これはスワンディ綴りの非合理性を指摘するもので、上記事項を具体化するため、1956年7月19日付教育文化相決定書第44876/S号により、同年8月1日にインドネシア語綴り改新委員会(Panitia Pembaharuan Ejaan Bahasa Indonsia)が発足することとなった。これより先1953年10月には雑誌『言語と文化』（*Bahasa dan Budaya*）がスワンディ綴り特集を組み、教員、言語学者がスワンディ綴りへの意見、提案を行っている。その中にはマドン・ルビス（当時メダン在住の教員）、アナス・マルフ（当時教育文化省職員）、プルボチョロコ、スラメット（ジャカルタ公立学校制度視学官）、プリヨノ、トゥパンノ（アンボン在住の教員）らがいた。これに対しスワンディ綴りを明確かつ単純で印刷物の改定などを行う必要がなく、経済的との理由でその継続を擁護する意見も出された。

一方、1956年9月には第二回インドネシア語会議に参加したマラヤの語学担当教員達がジョホールで第三回マレー言語・文学会議を開催し、マレー語とインドネシア語の綴り

を統一したいとの意向を明らかにした。この背景にはインドネシアとの言語面での統一によりインドネシアの力を得て華人系住民に対し政治的かつ人口数で優位に立てるという期待があったと言われている。[14]

インドネシアの教育文化省に送られてきた上記マレー言語・文学会議の意見書も視野に入れて、第二回インドネシア語会議の決定、および綴りに関する 1954 年 7 月 24 日付教育文化相決定書第 46478/S 号の内容をも含むインドネシア政府の要請を受け、インドネシア語綴り改新委員会は新綴りの作成に着手した。

インドネシア語綴り改新委員会のメンバーは下記の通りである（肩書きは当時)。

１．プリヨノ委員長（インドネシア大学文学部長）
２．プルボチョロコ（インドネシア大学文学部教授）
３．アミン・シンギ・チトロソモ（文化庁インドネシア語・地方語調査部長）
４．セルジウス・フタガルン（教育文化省管理職員コース長）
５．ライフル・アマール（ジャカルタ文学部講師）
６．サルムン（ジャカルタ文学部講師・社会省職員）
７．カトッポ（教育文化省職員。国立文書館）
８．アブドゥル・ラヒム（マカッサル言語・文化機関副支局長）
９．プトゥ・スラメット
10. イダ・バグス・マントラ（デンパサールの民間人）
11. アトマミハルジョ（文化庁言語部職員）
12. St.イスカンダル（文化庁言語部職員）
13. マンガタス・ナスチオン（文化庁言語部職員）
14. マルカス・アトマサスミタ（文化庁言語部職員）
15. スミディ（文化庁職員）在ジョクジャカルタ
16. サギムン（文化庁職員）在ジョクジャカルタ
17. St.M.サイド（宗教省職員）

書記：A.K. ハディ（教育文化省職員）

委員会は 1956 年 10 月から 1957 年 8 月までに総会を 10 回、綴り作成小委員会を 35 回開き、小委員会には 12 人程のメンバーが毎回出席した。また、言語面における各地の地域差を考慮し、メンバーにはタパヌリ（マンダイリン及びトバ)、ミナンカバウ（以上スマトラ)、スンダ、ジャワ（以上ジャワ)、ブギス、マカッサル、ミナハサ（以上スラウェシ)、

バリなどの各地方出身者を採用した。

プリヨノが教育文化相に就任したため委員長職を辞退し、1957 年 5 月 10 日付教育文化相決定書第 45182/5 号により 1957 年 4 月 1 日よりカトッポが委員長となり、スロトが書記として加わることとなり、最終的に 1957 年 8 月 6 日改新綴りが発表された。[15]

改新綴り：

1.	a	api
2.	aw	pulaw
3.	ay	gulay
4.	b	lembab, boléh
5.	d	dataŋ
6.	e	emas, berat
7.	é	ékor, korék
8.	f	fakulta
9.	g	gaya
10.	h	hari, salah
11.	i	ikan, hati
12.	j	jadi
13.	k	kayu, anak
14.	l	lari, gatal
15.	m	mabuk, selam
16.	n	nasi, makan
17.	ñ	ñañi
18.	ŋ	senaŋ
19.	o	obat, toko
20.	oy	sepoy
21.	p	pukul
22.	r	ratu, ular
23.	s	sapu, panas
24.	ś	śarat

25. t　　tali, sakit

26. ṭ　　ṭium

27. u　　ular, palu

28. v　　vokal

29. w　　wahai

30. y　　yaŋ

31. z　　zakat

スワンディ綴りと改新綴りの相違点は以下の通りである。

１．ｆ、ｚ、ｖおよびśが加わる。

２．二重母音 ai→ay，au→aw，oi→oy に変更。

３．ｅをｅとéに分ける。

４．tj→ṭ，dj→ｊ，nj→ñ，sj→ś，ng→ŋ，j→ｙに変更。

５．外来語を除き、語頭のｈは消える。

例：habis→abis,　hutan→utan

6. 語中のｈに関し、同じ母音に挟まれている場合はそのまま表記し、異なる母音に挟まれている場合は消える。

例：bahan→bahan,　tahun→taun

7. ch という綴りがなくなる。

上記１．に関し、ｆ、ｚ、ｖ、ś は外来語にのみ適用される。

２．の二重母音は切り離せない２つの音が合体したものであり、ai→ay，au→aw，oi→oy の変化はマレー語文法独特のもので、例えば mengulay（スープを作る）と mengulai（砂糖で味を付ける）の区別ができるようになる。

改新綴りの大原則は１音１文字ということである。そこでスワンディ綴りの１音２文字を記号を付けることにより４．のように１文字化した。またスワンディ綴りに存在しない x は ks に置き換える。

以上の他インドネシア語綴り改新委員会は外来語、特にオランダ語単語をインドネシア語化する時の規則、大文字、小文字の使い方、省略文字、符号等について詳細に規定している。

上記改新綴りは４．のようにタイプライターで打つことができない記号、符号を使用するなど、非合理的であり、またマレーシアでも綴りに関し新しい動きを見せるなどの理由でコンセプトに止まり、実際に使用されるには至らなかった。

２．４．インドネシア・マレーシアの言語協力　－　ムリンド綴り　(Melayu-Indonesia 綴り)

1957 年 8 月 31 日に後にマレーシア連邦の母体となるマラヤ連邦が独立し、それ以降両国の学術文化交流が始まった。9 月にはインドネシアがマレーシア人学生 5 名をインドネシア大学で言語および文学を学ばせるべく招待した。翌年 5 月には 9 名のマレーシア人言語専門家が地方語を母語とするインドネシア人や外国人を対象とするインドネシア語教育の方法を学ぶためインドネシアを訪問した。8 月にはインドネシア - マラヤ連邦言語専門家会議の開催を両国が承認した。10 月に言語･文学協会（Dewan Bahasa dan Pustaka）の長であるシェド・ナシール・ビン・イスマイルとインドネシアの教育文化相プリヨノによる綴り統一のための会議開催承認が行われた。

翌 1959 年 4 月 17 日にはインドネシア・マラヤ連邦友好条約が、インドネシア共和国首相 ジュアンダ・カルタウィジョヨとマラヤ連邦副首相アブドゥル・ラザック・ビン・フセインとの間で締結された。独立がインドネシアに 12 年遅れたマラヤ連邦はその後も英語を公用語とし、高等教育機関においては 1984 年まで教育用語が英語であった。労働力確保というイギリス植民地政府の方針で多くの中国人、タミル人がマレー半島に流入し、マレー語を母語とするマレー系住民は 40%ほどになった。更にその中の知識層は英語を使用する言語環境にあった。1957 年独立とともにマラヤ連邦の国語はマレー語であると決定されたが、実際にマレー語を使用する人口は少なく、マレー語そのものが軽視され、マレー語発展の努力はごく一部のマレー知識人の間でのみなされた。

他方 250 以上のエスニック・グループからなるインドネシアは統一国家を維持していくために言語の統一が最重要課題の一つであった。そのため独立と同時にインドネシア全土に通用するインドネシア語の整備が開始された。このような両国の社会的背景の違いにより、言語の発展速度においても内容においても、その差は広がるばかりであった。国語であるマレー語を近代言語として確立させたいマラヤ連邦は、言語分野でインドネシアからの協力が不可欠であった。

同起源の言語であるにもかかわらず、社会言語学的、地理的、歴史的な相違により両国の言語は綴り、用語、文法構造など多くの点で相違が生じていた。この相違を減少させるための努力を、マレー語を国語とする国民が共同で行う必要があることを両国の言語専門家は痛感した。[16]その結果友好条約の一環として両国共通綴りの形成という構想が表面化し、1958 年 10 月のシェド・ナシール・ビン・イスマイルとプリヨノ教育文化相の話し合いに基づきインドネシア・マレー共同委員会が結成され、ここからムリンド綴りという共同綴りの概念が 1959 年に生まれた。

インドネシア側は教育文化省下に置かれたマレー語・インドネシア語協力実行委員会(Panitia Pelaksanaan Kerjasama Bahasa Melayu-Bahasa Indonesia)がムリンド綴りの作成にあたった。その構成は以下の通りである。

１．スラメットムルヨノ（委員長）
２．E.カトッポ　（副委員長）
３．ヌル・St. イスカンダル
４．A.K.ハディ　（書記兼任）
５．イムラッド・イドリス　（マラヤ連邦におけるマレー語・インドネシア語協力実行委員会の書記局長）

マラヤ連邦側は教育省下に置かれたマラヤ連邦新ローマ字綴り委員会（Jawatan Kuasa Ejaan Rumi Persekutuan Tanah Melayu）が下記の委員を中心にムリンド綴りの作成にあたった。

１．シェド・ナシール・ビン・イスマイル　（委員長）
２．アミヌディン・ビン・バキ
３．ザイナル・アビディン・ビン・アリ
４．ブヨン・ビン・アディル
５．Md.ノル・ビン・アフマッド
６．マフムッド・ビン・アフマッド
７．ラムリ・ビン・アブドゥル・ハディ
８．ザーバ　（顧問）
９．スフィアン・サフリ　（書記）

1959年12月4日より7日まで上記両国のムリンド綴り作成委員会がジャカルタにおいて会議を重ね、下記決定を採択した。[17]

1．マラヤ連邦とインドネシア共和国の綴り共同委員会により作成された綴りをムリンド綴りとする。

2．ムリンド綴りはマラヤ連邦、インドネシア共和国両国で現在使用されている綴りとは異なることがあるが、この変更は両国の綴りを共通にするためのものであり、どちらかの国の綴りに偏るものではない。

3．ムリンド綴りは：

（1）２種類の母音が合体した二重母音を除き、１音１文字とする。

（2）形成するにあたり音を重視する。

（3）例外は最小限にとどめる。

ムリンド綴り：

1．　a　lagu, maaf

2.　ay　sampay

3.　aw　kerbaw, sawdara

4.　b　sebab, akrab

5.　c　cuci,

6.　d　maksud, abad

7.　e　terbang, lemah

8.　é　élok, korék

9.　f　fikiran, fonem

10.　g　gunung

11.　h　harus, lihat, pahit

12.　i　ikan, putih

13.　j　jadi

14.　k　bapak, paksa, rakyat

15.　l　luka

16.　m　makan

17.　n　cinta, puncak

18. ŋ datanŋ
19. ñ ñañi
20. o bola, potong
21. oy sepoy, amboy
22. p Republik
23. r rumah
24. s sapu
25. š šiwa, šarat, šarif
26. t tulis
27. u lubang, duduk
28. w swatantra, swasta
29. y panitya
30. z zakat, zat

上記の綴りに関し、①9、25、30 の f、š、及び z は外来語のみに使用される。

②11 の h に関して前後を異なる母音に挟まれている場合も h を消去してはいけない。

例：ta<u>h</u>un，sa<u>h</u>ut， pa<u>h</u>it

③ムリンド綴りには v の文字は存在しない。universitas，revolusi 等の v を使用する外来語の v は b あるいは p に置き換える。

④この他、大文字、小文字の使い方、省略文字、符号についても規定しているが、その内容は改新綴りと大きな変化は見られない。

以上が改新綴りとの相違点である。また問題点として、3 のawの後に接尾辞anが付く場合、例えばkepulaw<u>an</u>となり、原形を知らないと発音が／ k ∂pulauan／ではなく／k∂pulawan／になってしまう点があげられる。

ムリンド綴りは両国政府が同時に発表し、その決定事項は遅くとも 1962 年 1 月までに実施されることになった。また 1959 年 12 月 7 日のムリンド綴り作成委員会は共同声明を出し、その中でこの発表をもってムリンド綴りに関する両国の話し合いは終了すると発表した。インドネシア共和国はこのムリンド綴りに関する共同発表の内容を 1961 年に出版物として刊行している。[18]

1960 年インドネシア駐マレーシア大使ラズィフとマレーシア教育相キー・ジョハリの話

し合いで文化交流のため、インドネシア人教員をマレーシアの中等学校へ派遣することを決定した。またヤコブ・ビン・ムハマッドが代表となりインドネシアの初等学校から大学までの言語教育システムを学ぶため、マラヤ連邦からインドネシアへ教員が 10 名派遣された。マラヤ連邦でマレー語を教育用語として使用するために、インドネシア語が教育用語となっているインドネシアの初等学校、中等学校での教育状況を学べく、クランタン州の教育者グループがインドネシアの政府奨学生としてインドネシアを訪問した。

しかしこの後ラーマン首相によりマレーシア連邦設立構想が打ち出されるにつれ両国の政府間関係が次第に悪化し、1963 年にはインドネシアの「マレーシア対決」政策が始まった。これは 1963 年から 1966 年までのスカルノ大統領による、マレーシア連邦結成反対の外交政策である。スカルノはマレ―シア連邦の結成をイギリスの新植民地主義によるものとしてマレーシアの粉砕を唱えた。このような政治的緊張関係の中であったが 1961 年末からアメリカのイースト・ウエストセンター、アドヴァンスプロジェクト機構（Institute of Advanced Projects）のニール・バウワー、アジア学生プログラムディレクターのロナルドS.アンダーソン、イースト・ウエストセンター学生プログラムのメリル・ハイザーおよびデビッド・デ・ケルジュ博士はインドネシア人学生とアメリカ人学生約３０ 名と共にインドネシアの新聞、学校教材、スカルノの演説などから単語を拾い、数ヶ月間で 113,450 枚のカードを作成した。またアリシャバナ[19]は 1962 年 8 月から 8 ヶ月間、言語・文学協会の長であるシェ・ナシール・ビン・イスマイルの援助で*Berita Harian*、*Gema Dunia*、*Kisah Bintang*、*Film*、*Malaya Merdeka*、*Mestika*、*Qalam*、*Utusan Melayu*などの新聞、雑誌から単語を集め綴りの統一に着手した。

アリシャバナはインドネシア人でありながら1963年６月から1968年６月までマラヤ大学マレー言語･文学部の学部長となり、マレー人大学生に自著の『インドネシア語新文法』[20]をインドネシア語―マレーシア語文法と名称を変え、これを教材にマレー語を教えた。これは当時マレーシア語が標準化[21]されておらず、インドネシア語の力を借りて発展せざるを得なかったことを表している。このほかアリシャバナは 1967 年からマレーシア国民に最も影響力を持つ新聞、雑誌から単語を集め、10 ヶ月でマレー語 20 万語、インドネシア語 25 万語分のカードを作成した。またそれに先立ち 1963 年には綴り、用語、文法の統一を訴え、更に*Journal of World History*（1967）に寄稿した論文*Modern Linguistics in the Face of Linguistics Problems of the Twentieth Century*において、マレー語統一のためにはまず綴りの統一が不可欠であり､インドネシア､マレーシア､ブルネイ･ダルサラム、

シンガポールの言語、特に用語の標準化のため、4 カ国共同の言語機関設立の必要性を訴えた。これは後のインドネシア・マレーシア言語審議会（Mejelis Bahasa Indonesia Malaysia[MBIM]）設立を先取りした形の提言であった。しかしながらマレーシア対決の結果[22]、ムリンド綴りは実施に至らず、この綴りもコンセプトに終わってしまった。

２．５．　本格的言語機関の設立　－　インドネシア語新綴り／LBK綴り[23]

1963 年から 1966 年までのマレーシア対決の期間、綴りに関する公式の協議は両国間で行われなかった。その間インドネシア国内ではムリンド綴りに関し、タイプライターでは打てない文字、記号があり、実用的ではないと非難の声が上がり、ムリンド綴りのコンセプトは却下された。マレーシア対決の間に 1956 年 7 月 19 日に設立された「インドネシア語綴り改新委員会」が解散し、その後 1966 年まで言語文学協会（Lembaga Bahasa dan Kesusastraan[LBK]）[24]下の専門用語委員会（Komisi Istilah）で言語分野、科学用語などのインドネシア語形成活動が細々と続けられた。ムリンド綴りを改正した綴りを作成すべく教育文化省文化総局下のLBKに 1966 年 5 月 20 日綴りを専門とする「言語文学協会インドネシア語綴り緊急計画委員会」(Panitia Crash-Program Edjaan Bahasa Indonesia Lembaga Bahasa dan Kesusastraan）が発足した。本委員会はLBKの専門家とインドネシア大学文学部関係者から構成されており、そのメンバーは下記の通りである。

1. アントン・ムリオノ（委員長、インドネシア大学文学部長）
2. S. W. ルジアティ・ムルヤディ（副委員長、教育文化省文化総局言語文学局）
3. バスキ・スハルディ　（第 2 書記、インドネシア大学文学部）
4. スリ・ティムール・スラトマン（第 1 書記、インドネシア大学文学部）
5. ルクマン・アリ（教育文化省文化総局言語文学局）
6. サルダント・チョクロウィノト
7. リドワン・マナフ

同委員会はマレーシア、ブルネイ・ダルサラム（1984 年 1 月に独立）、シンガポール（1965 年 8 月マレーシアから分離独立）などマレー語を使用している国々のマレー語の発展を助け、指導していくという使命感を持ち、上記 3 カ国のマレー語と共にインドネシア語は近代世界の主要な言語の 1 つとなり、東南アジア諸国においてもマレー語が重要な地位を占

めるであろうと確信していた。

1966 年 8 月末には綴りが完成し、同年 10 月 28 日に発表となった。その間の 1966 年 9 月にハリムルティ・クリダラクサナ（インドネシア大学文学部）とＳ．エフェンディ（教育文化省文化総局言語文学局）が加わり、その後スリ・ティムール・スラトマンがハンブルク大学へ着任のため辞任した。1967 年 6 月末には上記６、７の両名に代わり、ジョコ・クンチョノ（インドネシア大学文学部）が参加している。1967 年 9 月 19 日付教育文化相決定書第 062/67 号に基づき、この委員会は教育文化省直轄のインドネシア語綴り委員会として正式に承認され、名称も「LBK綴り委員会」から「インドネシア語綴り委員会」（Panitia Edjaan Bahasa Indonesia）に変更された。[25]

一方マレーシアは 1966 年 9 月 7 日、ムリンド綴り制度委員会（Jawatankuasa Sistem Ejaan Melindo）の会議をクアラルンプールの言語・文学協会で開き、ムリンド綴りを両国で承認することに同意した。しかしながら後述のように、1967 年 6 月 27 日にインドネシア・マレーシア綴り委員会（Jawatankuasa Ejaan Indonesia dan Malaysia）がムリンド綴りの非合理性を認め、それに代わり近代語の要素がより強いLBK綴りを受け入れた。

新綴りのコンセプトを作成するにあたり、インドネシア語綴り委員会は「インドネシア語綴り改新委員会」の成果およびインドネシアの「マレー語・インドネシア語協力実施委員会」とマレーシア側の「マラヤ連邦新ローマ字綴り委員会」の共同成果（＝ムリンド綴り）を考慮に入れた。そして①正しい綴り作成に新基準を与える言語分野の学問的発展、②インドネシア語は現在の綴りでは不十分で正しく表現できない、③全インドネシアで通用する句読点や綴りの統一の必要性、④東南アジアや全世界でインドネシア語が果たす多大な役割、⑤読み、書きの重要性、の 5 つの要因を基準に改新が行われた。特に④は、1961 年に東南アジア連合（ASA）構想が生まれ、1967 年 8 月 8 日には東南アジア諸国連合（ASEAN）がバンコクで結成されたこととも密接な関係があり、マレー語圏の諸国がアセアンの中で発言権を高めたいとする汎マレー主義的な考えもうかがわれる。

「インドネシア語綴り委員会」は１音１文字、実用性を考えてタイプライターで表記できる文字を使用、そして言語学的に正しく、一般社会に通用する音を採用することを原則としたため、改新綴り、ムリンド綴りで使用された新文字は避けた。本委員会が提示したものは中部スマトラ、およびマレー半島とスマトラ島の間に点在するリオウ・リンガ諸島の地方語で、マレー語の基となった古来のリアウ・マレー語とは異なり、規則性を有し言語学的に正しい近代語としてのインドネシア語綴りである。その詳細は下記の通りである。

インドネシア語新綴り：

1. **a** anak, mana
2. **aw** harimaw
3. **ay** panday
4. **b** bantu, tumbuh
5. **c** cara, kaca
6. **d** damai, tanda
7. **e** [e] [∂] enak, sore, emas, sepi
8. **f** film, sifat
9. **g** ganti, juga
10. **h** hari, marah
11. **i** irama, api
12. **j** jalan, meja
13. **k** kamar, masak
14. **kh** khabar, akhlak
15. **l** lari, kapal
16. **m** mana, salam
17. **n** nama, aman
18. **ng** ngarai, singa, sayang
19. **ny** nyala, sunyi
20. **o** orang, tokoh
21. **oy** amboy, boykot
22. **p** pagi, siap
23. **r** rasa, sabar
24. **s** saya, kapas
25. **sy** syarat, masyarakat
26. **t** tadi, bakat
27. **u** usia, itu
28. **v** varia, universitas
29. **w** wanita, sawah

30. **y** yang, karya

31. **z** zat, izin

上記アルファベット綴り以外にも前置詞、接続詞、複合語、複数形、小文字、大文字、符号等についても詳細に述べられている。

インドネシア語新綴りとムリンド綴りとの主な相違点は、以下の通りである。

1. ムリンド綴りでは e と é という表記で区別されていたが、新綴りでは双方とも e と表記する。
2. ムリンド綴りには kh という綴りの概念がなかったが、新綴りでは kh が主にアラビア語源の外来語に使用されるようになった。
3. ムリンド綴りの ñ の音が新綴りでは ny で表記される。

   例：ñañi → nyanyi
4. ムリンド綴りの ŋ の音が新綴りでは ng で表記される。

   例： dataŋ → datang
5. ムリンド綴りの š の音が新綴りでは sy で表記される。

   例： šarat → syarat
6. ムリンド綴りには v という綴りの概念がなかったが、新綴りでは v が使用されるようになった。 例：universitas
7. 場所を示す前置詞の di（~で）と ke（~へ）が後ろの普通名詞と切り離された。

   例： disini → di sini

２．５．１．インドネシア国内での新綴り普及過程

インドネシア語新綴り自体は短期間で作成され、1967 年 10 月 28 日から唯一の公式綴りとして施行されることになっていた。しかし旧綴りからインドネシア語新綴りへの移行期間が長くなることが予想され、その間既存の印刷物、教科書等は在庫がなくなるまで使用を認められ、一方新規の出版物は全て新綴り字で印刷するという手順であった。正式発表前にテレビを通し言語学者がシリーズでインドネシア語新綴りの解説を行うほか、教育文化省文化総局長自らインドネシア語新綴りの啓蒙に努め、官民一体で新綴りの社会への普及を推し進めた。

1965 年「9 月 30 日事件」でスカルノ大統領が事実上失脚し、共産系勢力を制圧したスハルト将軍が実権を握ることとなった。この政権交代により 1966 年 3 月からマレーシアとの対立関係終結のための交渉が開始され，8 月にインドネシア - マレーシア平和協定が締結された。こうした変化の中で学生レベルの交流も再開した。9 月には言語・文学協会会長であるシェド・ナシール・ビン・イスマイルが、綴り統一活動継続の打診のためインドネシアを訪問した。翌 1967 年 3 月スハルトが第 2 代大統領となり、同年 8 月 13 日に両国の国交が再開されていたが、スカルノ前大統領の影響は依然として強く、「英国製」とみられたマレーシアに対する反感は一部国民の間に残っていた。そのため、新綴りに関しても実際には学術的見地から決定されたが、マレーシア語の綴りを多く取り入れているなどの理由で反対の声が多かった。（2.5.2.5.を参照）これらの反対を受け、教育相はスワンディ綴りのように大臣決定ではなく、政府規約として承認する事とした。

1960 年代はインドネシアでも教科書、辞書，翻訳本などの書物が不足していたが、マレーシアではその事情は更に深刻で、綴りだけでなく全面的にマレーシア語とインドネシア語を統一し、インドネシアの書物を読めるようにしたいという考えがマレーシア側にはあった。[26]アリシャバナによると 1968 年時点でインドネシアの書物、雑誌、新聞が数多くマレーシアに入り、マレー語がインドネシア語に形態学的に近づいており、ラジオ、テレビを通し，その傾向は強まっていった。当時インドネシアは“Politik Susah Teknik Mudah”（政治不安定、技術は安定），マレーシアは”Politik Mudah Teknik Susah”（政治安定、技術は不安定）と言われており、インドネシアはマレーシア対決後でスカルノ派の力も残存しており、政治的に揺れていたが、言語分野の技術面に問題はなかった。一方マレーシアは複雑な要因を抱えつつも政治的には相対的に安定していたが、言語分野の技術はインドネシアほど発展していなかった。そしてマレーシアでは 1966 年 9 月 7 日ムリンド綴り制度委員会（Jawatan Kuasa Sistem Ejaan Melindo）がクアラルンプールの言語・文学協会（Dewan Bahasa dan Pustaka[DBP]）で会議を開き、ムリンド綴りを両国で承認する事に同意した。

1967 年 2 月 21 日、最高作戦司令部（KOTI）[27]第 5 部隊とマンダラ・シアガ司令部（Komando Mandala Siaga）がKOTI言語専門家チームを結成し（1968 年までで、その後はインドネシア語綴り委員会に権限が移る）、S.W.ルジアティ・ムルヤディが委員長に、アントン・ムリオノが副委員長に就任し、ルクマン・アリ、ジョコ・クンチョノ、バスキ・スハルディがメンバーとなった。この専門家チームを通しマレーシア側へムリンド綴りが

非合理的且つ非実用的である旨を伝えた。この頃マレーシアでは言語に関して全面的にインドネシアに依存しており、用語の作成においてもマレーシアでは国内調査をしておらず、インドネシアで使用されている用語をマレーシアでも利用しつつ国内調査を実施する予定という状態であった。

このような点からもマレーシア側のシェド・ナシール・ビン・イスマイルはマレー語発展のためにいかにインドネシアから援助を受けているかを語り、インドネシア、マレーシア両国の用語委員会の話し合いの必要性を説いた。[28]これはこの共同作成綴りでマレー語が英語、中国語と対等の近代語になることを期待していたためと言われている。1967 年 6 月 27 日にクアラルンプールで開催された、インドネシア側のルジアティ・ムルヤディを団長とするKOTI言語専門家チームとマレーシア側のシェド・ナシール・ビン・イスマイルを長とする「マレーシア語綴り委員会」との会議で下記のようなインドネシア・マレーシア教育協力協定が結ばれ、マレーシア側はムリンド綴りの廃止、およびLBK綴りのコンセプト受け入れを了承した。

<u>インドネシア共和国・マレーシア教育協力協定（1967 年 6 月 27 日）一部</u>

現在進行中のマレーシア語･インドネシア語綴りの修正は、以下の諸要因に基づく。
（1）特に綴り作成に対し貢献をしている言語分野の進歩や科学分野の発展。
（2）現在のマレーシア語、インドネシア語の綴りに見られる不備、欠点。
（3）マレーシア、インドネシア両国で使用される綴りと句読点の規則化の必要性。
（4）東南アジアおよび全世界におけるマレーシア語およびインドネシア語が果たす役割。
（5）読み、書き能力の増進。

上記で使用される綴りとは、①1 音 1 文字になるような技術的配慮、②その表記が言語学や現行の社会科学に関する深い研究に反映するような学問的配慮、に基づく文字による音素表記を意味している。

上記の配慮に基づきマレーシアマレー語綴り委員会（Jawatankuasa Ejaan Bahasa Melayu Malaysia）とインドネシア側の KOTI 言語学者チームが、マレーシア語とインドネシア語の合理的、経済的かつ学問的な唯一の共通綴り制度を実現することに合意し、両国が示唆した任務を遂行することになった。

両国側の意見交換、共同調査・作業の結果、両国の綴りの発展は両国の学問の進歩や合

理主義から生じた必要性に応えた当然の結果であることを結論付け、合意に達した。これに関連し、インドネシア、マレーシア両国民の同一の理想を達成するために口頭や書式にかかわらず、あらゆる手段を用いてマレーシア語とインドネシア語の関係を向上させる必要があるという同一見解に達した。

両委員会による数日間にわたる会議の後マレーシア語とインドネシア語の双方に適応し、合理的かつ学術的な１つの共同新綴り制度に関する確固たる唯一の決定に到達した。

合意された綴りの基本は下記の通りである。

１．　母音　①　マレーシア語、インドネシア語にはi,e,o,u,a,e,で表記される純粋６母音がある。

②　一般にマレーシアで“o”と綴られている最終音節の反狭後舌母音は最終閉音節の全狭後舌母音と同様に“u”で表記。

③　マレーシアで“e”と綴られている最終閉音節の半狭前舌母音は最終閉音節の全狭前舌母音と同様 ”i”で表記。

④　“ e”は〔e〕、〔ə〕の両方とも記号を付けず“e”と表記。但し教授する場合は便宜的に記号を用いても良い。

２．　二重母音　　表記は現行同様”au”,”ai”,”oi”とする。

３．　子音　　子音の音素は下記の通り表記される。

現行マレーシア語	現行インドネシア語	新綴り
p	p	p
b	b	b
t	t	t
k	k	k
d	d	d
g	g	g
ch	tj	c
j	dj	j
s	s	s
f	f	f
v	v	v

z	z	z
sh	sj	s
kh	ch	kh
gh	g	gh
h	h	h
m	m	m
n	n	n
ny	nj	ny
ng	ng	ng
l	l	l
r	r	r
w	w	w
y	i	y

４．　アルファベット　　a～z まで現在のアルファベットと同様。

５．　音節　　下記の１３種類となる（V は母音、K は子音）。

1	V	a-nak
2	KV	ra-kit
3	VK	ar-ti
4	KVK	tam-pak
5	KVKK	teks
6	KKV	kre-dit
7	KKVK	prang-ko
8	KKKV	stra-tegi
9	KKVKK	kom-pleks
10	KKKVK	struk-tur
11	VKK	ons
12	VKKK	arts
13	KVKKK	korps

６．　派生語　　この中の接辞は全て基語を連結させる。マレーシアで使用されている”sa”は”se”となり元語に連結する。

７．　不変化詞　　全ての不変化詞は ialah, adalah, adapun, kepada, daripada を除き基語から離す。

例：　dia pun

８．　人称代名詞の所有格、目的格

①　ku, kau, mu は基語と離して書く。例：　rumah ku（私の家）

②　nya は基語に連結させる。　例：　rumahnya（彼/彼女の家）

９．　重複語　ハイフンを用いて完全な形で書く。新聞などスペースが無い場合は数字の“２”を用いる。　例：rumah2（家々）

１０．複合語

①　複合語とは下記特長を有する語の集合体である。

ａ．２語の基語からなる。　例：rumah sakit（病院）

ｂ．基語の機能を果たす。（接辞を受け入れる）例：mata pelajaran（科目）

②　上記の定義に当てはまらない複合語は連結して書く。例：prasedjarah（先史）

１１．句読点　下記句読点は現行と同様に表記。

大文字、斜字体、読点、句点、セミコロン、コロン、ハイフン，ダッシュ、疑問符，感嘆符、括弧、角型括弧、引用符、スラッシュ

同年１１月に合理性を考慮し、２点の変更を行った。

１．　不変化詞に関し、“～もまた”という意味で使用する“pun”を除く全ての不変化詞（lah，kah，tah）は基語に繋げて書く。

例：　apakah, entahlah, ialah, walaupun,など。

２．　人称単数所有格、目的格に関し、全て前後の語に繋げて書く。

例：　adikku, adikmu, adiknya, kuambil, kauambil など。

また上記協定に基づきインドネシアからマレーシアへ多くの教員が派遣され、マレーシアからもインドネシアへ研修生が送られることになった。当時マレーシアには国語であるマレーシア語を中等学校で教授できる教師が少なく、マレーシアのキー・ジョハリ教育相がインドネシアに協力要請のため 1967 年 5 月に訪イした。これに応える形でインドネシアはマレーシア語の質的向上のため、教員とインドネシア語教科書の援助を行った。また

インドネシアの教育文化相との話し合いで4名のマレーシア人職員が来イし、マレーシアで教えるための科学、数学、技術分野の教員88名の選出を行った。こうして1967年から1982年までの15年間に計315名の数学、科学、技術、化学、物理、宗教分野の教員がマレーシアへ派遣されている。[29]

このインドネシア・マレーシア語綴り統一の決定はマレー語の歴史上きわめて重要な出来事であり、また初めての試みであった。実現すれば同一語地域が広がり、広範囲での意思の円滑な疎通が可能になる。そしてその中で思考形態を共有する事が可能となり、多くの人に利益をもたらす事となる。以上のように言語協力という観点からはマレーシア対決の後遺症はほとんどなく、綴りの統一は両国のコミュニケーションをより円滑にするための方途であった。1967年9月19日には両者の間でLBK綴りによる綴りの統一の調印がなされ、1968年2月28日からこのLBK綴りが唯一の公式綴りとして施行される予定であった。公式綴りとして両国で施行される前の1967年10月末インドネシア語セミナーが開かれ、段階的に新綴りを実施し、最低5年間の移行期間を設ける事で両国間で意見の合意がみられた。そして国民に新綴りを紹介し、彼らの意見を聞き、話し合いを行うことが決定された。

しかしながら、インドネシアではテレビ放送による新インドネシア語綴りの解説番組においてもこの綴りがマレーシア寄りではなく、また言語が国の優劣を決定するものではない事を力説したにもかかわらず、結局LBK綴りもインドネシア社会から多くの反対を受け、公式綴りとはならずコンセプトに終わってしまった。それどころか1967年から1969年までの2年間、この綴り問題は言語学的問題としてではなく、政治的問題として発展していった。ちなみにこの2年間を含む1966年から1972年までのインドネシアの新聞を検索すると、インドネシア語新綴りに対する政治的、経済的、宗教的また感情的な理由からの反対記事が多く掲載されている。

２．５．２　新聞各社の立場

上記状況の裏付けとなる1966年から1972年の間に発行され、綴りに関する記事を掲載していた新聞,雑誌は23誌あった（表1参照）。親政府系、中立系、反政府系の各新聞でどのように掲載記事の内容が異なっていたかを考察したい。『スル・マルハエン』（*Suluh Marhaen*）はスカルノ支持のインドネシア国民党（PNI）系新聞、『エル・バハル』（*El Bahar*）

は海軍系である。他方『ブリタ・ユダ』（*Berita Yudha*）は陸軍系、『アンカタン・ブルスンジャタ』（*Angkatan Bersendjata*）は国軍の新聞で親スハルト派である。また『シナール・ハラパン』（*Sinar Harapan*）はプロテスタント系、『コンパス』（*Kompas*）はカトリック系、『ドゥタ・マシャラカット』（*Duta Masjarakat*）は NU 系である。

表１　新綴りに関する新聞記事（1966 年－1972 年）（点）

新聞名	系	綴りに関する内容記事数		
		賛成	中立	反対
Yudha Minggu	親政府系		1	3
Berita Yudha	親政府系	8	6	3
Api Pantja Sila	親政府系	1		
Angkatan Bersendjata	新政府系	4	3	
Harian Abadi	親政府系	5		
Kompas	中立	10	5	5
Sinar Harapan	中立	35	15	16
Indonesia Raja	中立	7	3	1
Harian Kami	中立	9	10	9
Duta Masjarakat	中立			7
Revolusioner	中立			1
Ampera	中立	3	1	
Warta Harian	中立	2		3
Pelopor Baru	中立		1	2
Suara Islam	中立			1
Duta Revolusi Minggu	中立			1
Pedoman	中立	2	7	7
Harian Djakarta	中立			2
Djakarta Minggu	中立	3		1
Angkatan Baru	中立			2
Nusantara	中立	1		
Suluh Marhaen	反政府			4
El Bahar	反政府		1	12

（筆者作成）

スハルト体制の確立とともに反政府系新聞は廃刊に追い込まれ、ほとんどのものが親政府系あるいは中立系の新聞である。その中で前述したように『スル・マルハエン』と『エル・バハル』は反政府系新聞であり、インドネシア語新綴りに関して反対意見がほとんどであることが表１から明白である。検索した 23 紙の記事中、主な反対理由、賛成理由は以下の通りに分類できる。

２．５．2．１．　政治面からの反対

マレーシア対決でスカルノ大統領はマレーシア粉砕を唱え続け、対決終結後もスカルノ支持派は彼の思想を受け継いでいた。1927 年にスカルノが創設したインドネシア国民党の左派を代表するアリ・スラッフマン派は、スカルノが唱えているマルハエニズム[30]に傾倒しているグループであり、その事務局長バギンが、新綴りは新植民地主義、植民地主義、帝国主義（Nekolim)活動の一環であるとインドネシア語新綴りを非難した。彼らはスカルノのマレーシア粉砕政策を支持していることからマレーシアとの統一綴りであるインドネシア語新綴りを粉砕することは当然のことと考えた。親スカルノ派および 9 月 30 日事件以前のスカルノによる政治体制支持の民衆がもっとも非難した点は、実際にはマレーシア語、インドネシア語とも国際音声協会に従った形で、どちらかの言語に強く依拠したものではなかったが、新綴りのコンセプトがマレーシアの影響を受け、マレーシア語綴り寄りになっているということであった（『シナール・ハラパン』1967 年 12 月 6 日）。

マルハエン青年活動最高幹部会も新綴りは利用価値がなく、費用の無駄遣いとして非難した。[31]

一方この問題はマシュリ教育文化相を失脚させるためにある派が新綴りを利用して反対しているという噂も流れた。これに対し、『プドマン』紙主筆で影響力あるジャーナリストであるロシアン・アンワルは「綴り問題くらいでマシュリを引きおろすことはできない、それよりは教育のことを真剣に考えるべきである」と語っている（『ハリアン・カミ』1969 年 2 月 10 日）。

1967 年 8 月 8 日にアセアンが結成されたが、言語や綴りを含む多くの事項をアセアン加盟に合わせ、国際化の方向へ持っていく必要は無い、との意見も出された。

以上の意見は、親スカルノ派および旧体制（スハルト政権は自らを新体制、スカルノ体制を旧体制と呼称）支持の民衆の民族主義的な思想から出たものと考えられる。

２．５．２．２．　経済面からの反対

新綴りに変更するには教科書をはじめとする全ての出版物を印刷し直さねばならない。教科書だけでも小学生から大学生までの約 1000 万人分で１人 20 冊、各 200 ルピアと概算すると 400 億ルピアが必要となる。少ない教育予算からこれだけの額を支出するのは不可能であり、これを経済的に低迷している国の為に開発５カ年計画へ回すべきである、という意見が多く出された（『コンパス』1969 年１月 21 日）。実際には５年間の移行期間があり、その間旧綴りの教科書をはじめとする出版物はそのまま使用し、新規に出版するものから順に新綴りに切り換えていく方式をとるので多額の費用は必要でなかった。

また新綴りにするにはインドネシア国内に導入されていない新しい印刷機が必要であり、それを輸入すると外貨が流出し国内の経済状況が益々悪化するとの論調も少なくなかった。これに関しても、実際には新綴りには新しい文字は使用されず、従来の印刷機で十分であった。

２．５．２．３　宗教面からの反対

インドネシアの国民のほぼ９割がイスラム教徒であり、インドネシア語の中で多くのアラビア語源の単語が使用されている。当時アラビア語源の単語にはain(アイン)符号を‘adil, ra’yat のように表記してきたが、これが新綴りでは adil, rakyat のように符号は消去され、あるいは“k”を代用することとなった。また Allah を Alah, Qur’an を Koran にするなど、綴りにも変化が表れた。これに対しイスラーム側からは下記のような意見が出された（『スアラ・イスラム』1968 年 12 月）。

１．　アラビア語源の音を忠実に表記しないのは、イスラム教徒にとり許されないことであり、これはキリスト教普及のための活動である。

２．　新綴り制度の中にはアラビア語源の単語に関する有利な決定がないのが不満である。

３．　アラビア語本来の音が表現できないので，新綴りは中止すべきである。

４．　1952 年１月 17 日宗教省宗教教育局からアラビア文字からローマ字に切り換える綴り一覧が出された。また LBK 下の用語委員会（Komisi Istilah）でアラビア語の辞書を出版したが、全く役に立たないものであった。合理的でない、一般人には難しいなどの理由で社会的には知られず、普及していない。以上に鑑みイスラム教徒が会議を開き、正しい綴り制度を定め、統一すべきである。

1926 年東部ジャワのスラバヤ市とジョンバン県のウラマを中心として結成されたイス

ラーム組織ナフダトゥル・ウラマ（NU）[32]の青年部であるナフダトゥル・ウラマ学生青年協会は、LBKに対しアラビア語源単語の表記法が正しくないことを理由に書面で正式に反対を表明した。[33]

上記１．の意見を唱えるイスラム教徒により、インドネシア語新綴り委員会のキリスト教徒の委員に対し外国から金銭の供与を得ているという噂が流布され、何人かの委員が非難されるなどの個人攻撃が行われた。当時SARA（suku, agama, ras, antargolongan）、すなわち種族、宗教、人種、階級に関する議論は社会不安を醸成するデリケートな問題としてスハルト政権によって禁止された。当時インドネシアに住む多くのエスニックグループは、交通網の発展、都市化、政策移民などで隣接居住することが多くなり、習慣、言語などで軋轢が生じるようになった。その結果異教徒排斥、華人迫害、貧富層共存という事態が起こり、これが政府権力の腐敗への不満に発展するがあった。SARA とはこの社会政治的にタブーとされてきた問題である。新綴りもこの問題に巻き込まれる形となってしまった。

またシンガポール大学マレー語学科長であるアラブ系のシェド・フセイン・アタラス教授は、新綴りがインドネシア語およびマレーシア語に含まれるアラビア的要素を失うとして反対を表明した。また両国民衆の意見を無視して行う新綴りの採用は、綴りの統一どころか民衆の不満を掻き立てるだけであると述べ、新綴りに対する否定的な態度を明確にした（『コンパス』1968 年 12 月 2 日）。

２．５．２．４．　言語学面からの反対

ガジャマダ大学文学文化学部はムハマッド・ラムランを中心に 1967 年に新綴り調査チームを結成し、新綴りの不完全性を研究した。このチームは新綴りは１音１文字という建前であるが、実際には sj→sy,　ch → kh のように２文字となっている事例があると指摘した。また e, é に関する綴りも未完成であり、綴り変更の必要性は認めるが、更なる検討が必要であり、政府の決定は延期されるべきであるという結論を出した。現状は pihak-fihak, ke meja – kemeja, presiden – president のように単語に関して統一的な表記法がなく、大文字、句読点などの使い方に関しても一定の規則が存在しない。当時使用されていたスワンディ綴りは綴りのみの音声学面の規則で、語形論的規則はない。それゆえに綴りのみを変えても意味がないというのがガジャマダ大学グループの結論であった（『ワルタ・ハリアン』1969 年 2 月 12 日）。

文化界の長老アリシャバナは、言語に重要な役割を果たす教師、記者、文学者、および専門用語を必要とする分野の学生たちを新綴り作成に参加させなかったことが根本的な間違いであり、また綴りとともに文法的な事項をも含めた事も誤りであったと批判した。さらに彼はインドネシア語の方がマレーシア語よりも近代語に近く、学術用語も多いのでインドネシアが新綴りに関しては主導権を持つべきであると述べた（『インドネシア・ラヤ』1969 年 3 月 20 日）。

その他、一般民衆の中には、単語は綴りと異なり、それぞれの社会の中から生まれ育ったものでセンシティブなものであり、上から強制し統一するのは難しいという意見もあった。またマレーシア語とインドネシア語は同語源であるが、その後は各々独自の国語となったので統一する事はできないという意見も出された(『エル･バハル』1969 年 1 月 10 日)。

２．５．２．５．　感情面からの反対

感情面からの反対意見は大別して 4 つに分類できる。

（1）対外的不満、（2）国威衰退の不満、(3) 対内的不満、（4）言語環境に対する不満。このうち対外的不満が 6 項目、国威衰退の不満が 10 項目、対内的不満が 23 項目、言語環境に対する不満が 6 項目である。

（1）対外的不満

1．多くのエスニック・グループを統一することに寄与したインドネシア語の役割、実績に鑑みマレーシア語こそがインドネシア語に歩み寄るべきである。

2．西洋志向のマレーシアと同じ言語を使いたくない。

3．新綴りは必要であるが、すべてをマレーシアに合わせてはいけない。

4．マレーシアとインドネシアは違う。新綴りはマレーシア語のまねである。

5．インドネシア語のほうがマレーシア語より発展しているので劣っているマレーシア語に合わせる必要はない。

6．友好を深めるためなら綴りをマレーシア語寄りにするのではなく、言語担当教員の派遣を行えばよい。

（2）国威衰退の不満

7．歴史的にインドネシアとマレーシアの歩みは異なり、精神的にも大きな差がある。感情や考え方も異なるのに、なぜ言語を統一しなければならないのか。

8．既に国語として出来上がっているインドネシア語をなぜ外国の言語に合わせなければ

ならないのか。

9．オランダ時代そうであったように新綴りの採用でインドネシア人としてのアイデンティティが無くなり、新綴り作成者たちが望むような外国人としての感情が生まれてしまう。

10. 政府は帝国主義、植民地主義、封建主義という足かせをはずすために戦ったインドネシア国とインドネシア民族の純粋性を守るべく、新綴り問題に対処して欲しい。

11. 古い綴りでも不自由はない。新綴りは精神的混乱を伴うし、「青年の誓い」の精神に逆らっている。

12. 日本語、中国語のように固有の文字を持つ国があるのだからインドネシア語の綴りも変える必要は無い。

13. 青年の誓いではインドネシア固有の精神と独自の特徴を持ったインドネシア語を掲げているにもかかわらず、この新綴りはこれとは異なる。

14. 学問的に理解しやすい綴りと学者は述べているが、そのために新綴りは国語の尊厳を失い、これを犠牲にしてしまう。

15. インドネシアとは異なる道を歩んできたマレーシア語に基づくのはインドネシアの尊厳が許さない。

16. マレーシアとの友好のためにインドネシア国家と民族の尊厳をつぶし、国を売ってしまうのか。

（3）対内的不満

17. 新綴りはアセアン結成とほぼ同時で本来言語学者や文学者である綴り作成委員達が一時的に言語学の名の下に権力を振りかざし、この綴りを強制するということは政治的意図がある。

18. 多くの国民が反対しているにもかかわらず、国民の税金で運営されているインドネシア国営テレビ局で普及活動をしている。

19. 言語学者たちによる全ての外来語に関する説明が英語に関しての事例のみで、アラビア語の綴りに関しては触れられていない。これは新綴りがなにか特別の意味を持っているとしか考えられない。

20. 委員会はわずか８人の若い大学卒業者からのみ成っており、経験のないインテリばかりである。

21. 国の利益を犠牲にしてはならない。

22. 新綴りは言語の近代化の問題ではなく、政治をもて遊んでいる。
23. 政府が文学者を国の英雄に祭り上げようとしている。
24. 学者たちがむきになっている。
25. 言語の発展は使用者・一般国民が決定するのであり、上から強要するものではない。
26. 学用品も満足に揃ってないのに、新綴りのために政府が多額の支出をするのは望ましくない。
27. 新綴りにお金を使うなら、教育者の生活レベルを上げる、学用品を完備する、校舎を増やすべきである。
28. 新綴りは必要性のためか、あるいは商業的利益のためか。
29. 綴りを変えるより教育に力を入れるべきである。
30. 政府は社会が受け入れるかどうかわからない綴りを強要しようとしている。
31. 教育文化相のみでなく、内閣も新綴り問題を再検討してほしい。
32. 作家、執筆者はマレーシア、シンガポールでも本が売れるため印税が入って利益を得るが、国内の出版界はまだ準備ができない。
33. 教育文化省の予算をすべてこの綴りに使用するという噂が流れている。
34. 地方語を全く考慮していないので不満である。
35. 慣れている綴りをほかに変えるのは不本意である。
36. 新綴りにかかる費用を飢えている人民の食糧や総選挙費用に回すべきである。
37. 出版業界の利益のために実施しているに違いない。
38. 時期尚早である。
39. 一部の委員だけで作成するのではなく、大学や教員連盟など多くの学術機関のメンバーで再検討する必要がある。

（4）言語環境に対する不満

40. 言語は国民一人一人の精神に浸透していなければならないが、この新綴りにはそれがない。
41. ２つの綴り制度が同時に使われると子供たちに心理的に不安を与えることになる。その意味で心理学者による研究が必要である。
42. 言語を共通にすればコミュニケーションが円滑にいくというのは間違い。
43. 学術的、合理的、技術的に不十分な点が多すぎる。
44. 英語に似ているので、英語の影響を受けやすくなる。

45. 新綴りを修得するのには時間がかかる。

以上から、国内へ向けた不満が多いことが明白である。1966 年 3 月 11 日の大統領令公布後スハルト大統領による新体制が成立し、徐々にこの体制への批判が起こるようになった。このことから時代的に、上記反対意見は単なる綴りへの不満ではなく、政府への不満であるとも言えよう。

２．５．２．６．　学生団体からの反対

学生活動団体の中でも当時大きな影響力を持ち、新聞紙上にたびたび登場していたジャカルタ、バンドンの技術系学生が大多数を占めるインドネシア学生活動団体（Kesatuan Aksi Pelajar Indonesia[KAPI]）は 1968 年 7 月新綴りを拒否した。その主な理由は下記の通りである（『インドネシア・ラヤ』1968 年 12 月 9 日）。

1. 現在はインドネシア人であるスワンディが作成したスワンディ綴りを使っている。新綴りは英語綴りであり、外国語の綴りである。インドネシア人はインドネシアの綴りを使用すべきである。
2. 不十分さは認めるが、改正は一部でよく、全体的に変更する必要は無い。
3. 「青年の誓い」の精神に反する。
4. 印刷機の購入など、綴りの変更には費用がかかる。
5. 教育に支障が起こる。また現在の教育予算では不十分である。

1968 年 11 月、マシュリ教育文化相は KAPI との会談で、インドネシア語を国際語として認知してもらうべくユネスコを通じ運動しているので、インドネシア語そのものをシンプルな形にし、国語として近代化させたいと述べた。これに対し KAPI は、新綴りは英語の要素を含むので「青年の誓い」に背くと反論し、ジャカルタの建物、住宅地にプラカードを貼って抗議した。同月 KAPI の急進派の４名がアダム・マリク外相へ意見書を提出した。アダム・マリクは彼らに対し不十分な点は更に研究し、良い点は受け入れると述べ、1969 年から実施すると語った。12 月 5 日に KAPI は『インドネシア・ラヤ』紙を通し、外国人がインドネシア語を学びやすいように綴りを変えるということは自国の綴りを犠牲にするということなのか、と問いかけた。さらにインドネシア、マレーシア共自国の歴史から生まれた綴りを使用すればよく、統一した綴りを使うことで学生たちが授業を受けるのが困難になり、膨大な費用を使うのは馬鹿げていると訴えた（『インドネシア・ラヤ』

1969 年 12 月 9 日)。

毎土曜日 18 時 5 分から開始されるラジオ・テレビ放送局センター(Pusat Biro Siaran Radio & TV)のラジオ放送で 1969 年 1 月にインドネシア学生プレス協会（Ikatan Pers Mahasiswa Indonesia）が新綴りに関するアンケートを行った。結果は、反対 59.5%，賛成 27.0%、その他 13.5%であった（『プドマン』1969 年 1 月 25 日)。

なお新聞には下記のような新綴りに関する風刺絵も掲載された。

図２　インドネシア語新綴りに対する風刺絵

（*El Bahar*, January 21 1969）

黒幕[イギリス]に操られているマレーシア側からマレーシアの要求（インドネシアがマレーシア寄りになること）と引き換えに『1969 年のプレゼント』という形で新綴りが金銭とともに贈られた。これに対し多額の負債を抱え国内が貧困状態にあるインドネシア側は文学者団体「66 年代世代」や一般国民の反対を押し切り、これを受理しているという風刺である。

２．５．２．６．賛成意見

一方において新綴りに関する賛成意見も少なくなかった。大別すると（1）言語環境対する賛成意見、（２）対内的な賛成意見、（３）対外的な賛成意見、に分類される。

（１）言語環境に対する賛成意見

１．　新綴りは①ローマ字という国民になじみのある文字である、②国民が知らない文字および記号を使用していない、③外来語には f と v を使用する、という合理的な綴りである。

２．　新綴りは他の学問分野の発展とともに言語も発展していく結果生み出されたものであり、直ちに実施する事に賛成である。

３．　新綴りは学校教育の中で非常に必要とされている。新しい事を実施する時は反対がつき物であるが、内容を理解すれば反対はなくなる。新綴りの実施によりインドネシア語を完全な言語にすれば国際語[34]になることが促進される。

４．　新綴りはインドネシア語を変えるのではなく、インドネシア語綴りを変えるだけである。新綴りは外国語綴りでも地方語綴りでもなく、インドネシア語のためのインドネシア語綴りである。

５．　新綴りは新しい綴りではなく、綴りの簡素化である。この作業は 1947 年のスワンディ綴りの時から始まっている。

（２）対内的な賛成意見

６．　同時に２つの綴りが出回ると国内が混乱するというが、スワンディ綴りの時には何の混乱も起こっていない。

７．　インドネシアの出版物がマレーシアでも読まれるようになり、出版費が安くなる。

８．　新綴りに関し無関心でもいけないが、過度の政治的、感情的な発言をしてもいけない。

９．　新綴りは社会心理的、政治的な理由で反対されているのであり、言語学的な反対

ではない。

１０．　スワンディ綴りが未だに残されているのは、国民が新綴りに関心を持っていないからであり、もし言語専門機関が存在し、十分な費用が投じられれば普及し関心が持たれるようになる。

１１．　教員にも若者にも綴りは重要でないと考えられており、教育の場で学ぶ機会がなかった。

１２．　インドネシア語がインドネシアの歴史に基づいて近代語、標準語となるのであれば賛成である。

（3）　対外的な賛成意見

１３．　今こそオランダ綴りを止める時である。

１４．　マレーシアの言いなりになるな、という意見に対し、マレーシアが歩み寄ってきた時、インドネシアにはすでに新綴りのコンセプトが出来上がっていたので、マレーシア寄りの綴りであるというのは間違いである。

１５．　綴り統一は両国語にとり非常に大きな発展であり、一刻も早急なる発表が望まれる。

１６．　インドネシア語は東南アジアの他の国々の言語より進んでいるので東南アジアのリンガフランカになるであろう。新綴りは書き言葉を正しくする事であり、口語には及んでいない。アラビア語、地方語には独自の文字があるのでこれに関しては現在既にインドネシア語になってしまっている単語を除き別の綴り制度を定めねばならない。

１７．　新綴りは今後アセアン諸国の共通語として使用されるようになるので、国際的に通用する綴りが好ましい。

１８．　新綴りに関してはマレーシアがインドネシアに歩み寄っている。

また新綴り賛成派の学識者達は、北からの共産主義の拡大の防波堤として新綴りが使われ、綴りの統一により隣国同士が結束し、ベトナム共産主義の南下を防ぐとの考えを持っていた（『ハリアン・ジャカルタ』1969 年 1 月 30 日）。また当時マレーシアおよびシンガポールのマレー系住民は華人を通し中国の影響を受けていたため、中国と断交状態にあったインドネシアと対中国体制の協力関係を希望していたが、言語を政治的に利用するのは適当ではないという反対の意見も一部に出ていた。[35]

さらにアセアン諸国の文化の母体としての新マレー文化圏の構築を期待しているが、言語で 1 つになる前に防衛面の協力体制が必要であるとの意見も提示された（『アンペラ』1969 年 1 月 28 日）。

一方で綴りが変わろうが変わるまいが大きな問題ではない。セミナーなどで問題を大きくしてはいけないと世論を牽制する意見もあった。

以上、当初予測された以上に新綴りをめぐる賛否両論の議論が過熱化した結果、政府はこれ以上新綴り普及活動を継続すると社会不安を引き起こす可能性があると判断し、教育文化相の名で 1969 年 3 月新綴り普及活動中止命令を出した。

２．５．３．　インドネシアのジャーナリスト会議

1967 年 8 月アントン・ムリオノが中心となり、毎年インドネシア、マレーシアの報道関係者が首都で意見交換のための会議を開くことを提案した。また両国記者が、相互の質的向上のため３－６ヶ月交代で相手国を訪れることとした。そして 8 月 23 日から 26 日までクアラルンプールにおいて第１回マレーシア･インドネシア記者セミナーが開催された。このセミナーで決定された提言は下記の通りである（『ハリアン・カミ』1967 年 8 月 31 日）。

１．　両国政府は直ちに新綴りの実施を決定する。

２．　両国のコミュニケーションを円滑にするインフラとしての綴りの統一を行う。

３．　新綴りを誤解している人が多い。近代化のために原則に則った綴りの変更を行わねばならない。健全な話し合い及び考えに基づき綴りを変更する事により、①将来の国内外のコミュニケーションの円滑性と合理性が促進される。②更に深い政治、経済、文化、教育面の関係が構築される。

新綴りに関し意見の相違があるため、同年 9 月 27 日インドネシア記者連合（Persatuan Wartawan Indonesia[PWI]）が中心となり、新綴りの影響を受ける一般国民の声を広く聞くため言語文学協会（Lembaga Bahasa dan Kesusasteraan[LBK]）、新聞企業家連合（Serikat Pengusaha Surat Kabar[SPS]）、インドネシア出版者連盟（Ikatan Penerbit Indonesia[IKAPI]）および言語専門家たちの参加を得てジャカルタで公開討論会を行った。この討論会の目的は、学問的見地から綴りを見ている言語学者だけではなく、新聞、出版、教育分野の人々で話し合いを行い、あらゆる角度から検討を加え綴りに対するさまざまな見解を引き出すことであった。この中でインドネシア記者連合のシモランキル教育部長は

綴り変更の緊急性について見直しを行うため「新聞、出版綴り字委員会」（Perumus）を設立した。この委員会での結論は、①時期尚早、②プレス、出版、他分野の学者達の意見を聞くことなく決定したため不十分さが残る、③政府は綴りの公表を延期し、コンセプトの弱点を指摘すべき、の三点であった。（『ドゥタ・マシャラカット』1967 年 9 月 28 日）

一方で他国の綴りの模倣ではなく、学術的理由に基づいた綴りの変更であるという共通理解が生まれた。

上記のセミナーと公開討論会の結果から、マレーシア側は新綴り実施に意欲的であり、インドネシア国内は新綴り賛成派と反対派に分かれていたことが伺える。

翌月 10 月 13 日にインドネシア記者連合は、新聞紙上で一般国民に以下の諸問題を提起した。

1．　言語と綴りのどちらが重要か。
2．　スワンディ綴りの不十分さ、外来語に関する綴りの統一がないことは認めるが、現在既にインドネシア語は国内外で正当に発展しているのではないか。
3．　同一民族、異なる国家間における綴り統一協力は正しいか。
4．　新綴りは国民や教育者に負担を負わせないか。
5．　新綴り施行は国内施設整備不足の中で国家の許容範囲を超えてしまうのではないか。

このような中、1968 年 3 月インドネシア、マレーシア両国記者懇談会がジャカルタで開催され、両国記者の協力体制はアセアンのためにも不可欠で綴りの統一も実施されるべきであるという結論が出された。7 月にはインドネシアの新聞 『アンペラ』、『カミ』および評論雑誌『ホリズン（*Horison)*』の一部記事に新綴りが使用され、H.B.ヤシン主宰の文芸雑誌『サストラ（*Sastra)*』にはヤシン自身が新綴りを使用した。ロシアン・アンワルも新綴りを使って記事を書いている。11 月にはジャカルタ芸術審議会（Dewan Kesenian Djakarta）が新綴りでプログラムを作成、配布を行った。10 月 26 日から 28 日までインドネシア言語学会（Ikatan Linguistik Indonesia）はインドネシア大学、教育大学の後援でジャカルタ、スマラン、ジョクジャカルタ、メダン、マレーシアからの参加者と共にセミナーを開き、政府に直ちに新綴りを公表するよう要請した。11 月にも同セミナーが LBK, ジャカルタ教育大学主催で行われた。さらに 12 月にはメダンでマレーシア，インドネシア共同書籍展覧会が行われた。このように 1968 年は、新綴り推進派の動きも一部で活発に見られた。

高校生を中心とするインドネシア学生青年活動団体(Kesatuan Aksi Pemuda Peladjar Indonesia[KAPPI])とインドネシア大学生活動団体（Kesatuan Aksi Mahasiswa Indonesia[KAMI]）は、北スマトラの KAPPI を除き反対の動きはなかった。他方インドネシア学生活動団体(Kesatuan Aksi Pelajar Indonesia[KAPI]）のメンバーは、塀に落書きをするなどの行為で反対を表明した。こうしたインドネシア国内の動きに対し、マレーシアの教育相は「新しい事を行う時には反対を伴うのが常である。マレーシアではほぼ全ての階層が新綴りを受け入れた」と発言した（『シナール・ハラパン』1969 年 2 月 17 日）。この様に、この時期インドネシアでは新綴りに対する反対運動が活発であったが、マレーシア国内ではこのような事態は起こらず､冷静にインドネシアの国内状況を観察していた。インドネシアのマシュリ教育文化相は、①新綴りが民衆に受け入れられない場合はこれを強制するものではなく、国民の意思に委ね、決定は国会に一任する、②また受け入れられた場合でもインドネシア独自の文字は作らない、③費用に関しても世論で言われているような多額ではなく、5 年以内に新綴りは円滑に普及するであろうなどと述べた（『シナール・ハラパン』1969 年 1 月 29 日）。

1969 年 1 月、国立インドネシア大学の国語の入試問題で新綴りが使われたことが問題となった。これに対し世論は、綴り問題は社会問題なので現在のインドネシアの状況を把握して行動しなければならない、政府が正式発表する前に一方的に新綴りを使用するのはルール違反である、言語学者の苦労は評価するが国立インドネシア大学の入学試験に使用するという強制的なやり方はいけない，といった意見が飛び交い、新綴り問題が再度浮上した。教育文化省は、新綴りは綴り、用語、文法の 3 部門に及び、インドネシア語の標準化という原則に基づいているという理由で賛成、国会は民主主義に反するという理由で反対ということで、賛否が分かれていた。

1969 年 1 月、初代副大統領モハマッド・ハッタは新綴り論争の最中次のような見解を新聞発表し、各紙がこれを取り上げた（『プドマン』1 月 27 日など）。

1． 国民全体に関わる問題を小さな委員会だけで決定してはならない。これは民主主義に反するものであり、あくまで国会で承認を得るべきである。

2． 約 400 億ルピアという膨大な費用を投入し､何百万冊の本を出版しなければならず､これは開発 5 カ年計画中には不可能であり、計画の支障となる。

3． 書籍に関し、外国にしかない印刷機による近代的印刷がみこまれているため、外貨が流出し、国内の受ける損害は多大である。流出分を教師の給料に充てたほうが良

い。

4．　綴りの違いがインドネシア、マレーシアの関係を悪くするとは考えられない。

5．　現在新綴りを使用している新聞や大学教員はそれを中止すべきであり、国がすでに新綴りを承認しているかのような発言は控えるべきである。

6．　知識層はスカルノ時代の影響をいまだ受けており、ある機関が提案したことはそのまま受け入れ実施したがる傾向があるが、今こそ我々は長い間スカルノに踏みつけにされていた民主主義に戻らねばならない。

アダム・マリク外相は、新綴りは開拓されたが、これを決定するのは国民であり、インドネシア語とマレーシア語の統一を国民に強要してはならない、新綴り実施については木が育つのを待つように、時期を待たねばならない、と述べた（『インドネシア・ラヤ』『シナール・ハラパン』1969 年 2 月 18 日）。

ロシアン・アンワルは、最も尊重すべきは教師、学生の意見であるとした。新綴りを学んで困難を生じればその旨を伝え、無理にその綴りを受け入れる必要性はない。そして彼ら教師、学生の意見を支えるのがプレスであり、それこそが民主主義であると述べた（『ハリアン・カミ』1969 年 1 月 27 日』）。

また作家アイップ・ロシディは、綴りは学術的問題であるから言語学者が最高権限を持つのは当然のことであるが、一般人の声、要望を聞かないで良いということではない。国内各分野の人々との話し合いなく、マレーシアと新綴りに関しての話し合いを行ったため、マレーシアがインドネシアに新綴りを押し付けたと勘違いし、反対をしているのである。もっと国民の心理、政治、経済面を考慮するべきである。また教育文化相も明確に態度を決めるべきである、と述べた（『コンパス』1969 年 2 月 4 日）。

これに対しマシュリ教育文化相は、各種階層の代表からなるフォーラム開催が必要であり、新綴りに対する誤解を解いて欲しいと語ったが、新綴りの公表日時は明らかにしなかった。3 月 22 日、教育文化相はあまりにも大きな社会問題になった新綴り問題を国会へ持ち込み、第 9 委員会（宗教、政治担当）の意見を仰いだが、ここでも結果がでることはなかった。

以上のような賛否両論を踏まえ、1969 年 1 月 31 日から 2 月 3 日までジャカルタで中央インドネシア教員活動団体（KAGI）主催によるインドネシア語に関する討論会が開催された。司会者は S.T.アリシャバナとインドネシア記者連合（PWI）の J.S.ハディスで、インドネシア語綴り委員会のアントン・ムリオノ委員長によるインドネシア語綴りの解説が

中心となった。

この討論会ではインドネシア大学文学部教員、ナショナル大学文学部教員の他、宗教教育関係の教員や宗教省の役人がパネラーとなり、小、中、高等学校のインドネシア語教員、大学生、イスラーム担当教員、キリスト教担当教員、記者らが参加した。この中で PWI はインドネシア語綴り委員会や政府は国民の声を聞かず、独断専行的に綴りを作成したために国民は新綴りを強要されていると考えているので、もっと広範囲から委員を選出すべきであると主張した。一方国民に対して、新綴りは近代化のために不可欠なものであるので見直しをしようと呼びかけた。ムリオノ委員長も委員会の拡大に賛成の意を表した。

一方宗教省代表は現在使用されているスワンディ綴りを改正しなければインドネシア語発展の支障になることは認めたが、新綴りは dh と z を混同しているなどアラビア語源の単語を考慮していないと批判した。

これに対しインドネシア語綴り委員会側は、新綴りはムリンド綴りとは異なるものであり、経済的にも国家の負担になるものではなく、原則は節約であることを力説した。

インドネシア大学文学部代表フドロ・フッドは言語学者たちは全力を投じて努力しているにもかかわらず、「青年の誓い」に背いているなどの中傷を受け悲しんでいると述べ、委員たちへの理解を求めた。

しかしながらこの討論会には反対派も参加しており、彼らは言語学者たちは楽観的すぎると非難し、政府に対してもあいまいな態度をとらず新綴りを否定するか、直ちに決定するか態度を明確にするべきであると訴えた（『スル・マルハエン』1969 年 2 月 1 日）。

この討論会の結論は以下のとおりである（『コンパス』199 年 2 月 1 日、『ハリアン・カミ』２日、『プドマン』4 日、『アンペラ』7 日）。

1. 現行インドネシア語綴り（スワンディ綴り）の標準化を完成する必要がある。
2. 教育文化省のインドネシア語綴り委員会が作成し、ディアン・ラヤット社が出版した綴り表の中の綴りのコンセプト（インドネシア語新綴り）を完璧なものにするために再検討する必要がある。
3. 綴り、用語、文法の標準化や広義の言語育成を進めるためにインドネシア社会の各階層、機関、言語学者たちを含む広い分野から専門家を集めた言語機関の設立が必要である。

こうして各界の意見をまとめたこの成果を綴り問題解決の材料として政府に提出することが決定された。

LBK 綴りに関してなぜ２国間協力のもと共通綴り作成に踏み切ったかを考えると、1 国で綴りと用語を改正するのは、特に独立間もないマレーシアの場合負担が重く、そのため両国専門家が協力して行ったというのが学術面から見た一番の理由であろう。これに対し当時インドネシアの一般国民は、綴りについて学術的に真剣に考えたのではなく、マレーシア対決の直後でマレーシアに反感を持ち反対したと言えよう。

1969 年スラウェシのマカッサルにおいても討論会が開かれ、この完全インドネシア語綴り普及に着手したが、インドネシア国内から反対の声が上がり作業は思うように進まなかったのは上記のとおりである。[36]

完全インドネシア語綴りを社会に普及させるにはまず広い社会層に綴りの正確さ、統一の必要性や重要性を認識させることから始めなければならない。しかしながら時期的にマレーシア対決（1963－1966）間もないころで、その余波が残る中、マレーシアとの協力に難色を示す世論が強かったのも事実である。

新綴りはもはや学術的な問題ではなく、社会問題へと発展し、言語学者もインドネシア語綴りを完成させるために政治に巻き込まれざるをえない状況となり、学問として純粋にインドネシア語綴りに関与する言語学者は少数派となってしまった。前述のように政府が言語学者を国の英雄に祭り上げようとしているという世論まで飛び出した。彼ら言語学者達はこの状況下、完全綴りの重要性を社会に理解させるため、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等のメディアを通し広く訴えかけた。しかしながらその重要性は社会の人々には理解されず、反新綴りの勢いは衰えなかった。

一方マレーシアとの人材交流は引き続き行われていた。1968 年マレーシアでは 200 名の教員を必要としていた。これに対しインドネシアはマレーシアにおけるマレーシア語を教育用語とする教育システムに協力し、1969 年末に 280 名の化学、数学分野のインドネシア人教員をマレーシアへ派遣した。[37]

またマレーシアではマレーシア国民大学構想が持ち上がり、マレーシアの教育相アブドゥル・ラーマン・ヤコブがこの大学の教員を養成するのに対し、インドネシアは 1970 年 5 月までにマレーシアへ 17 名のインドネシア人講師を派遣することに同意していると語った。同相は「インドネシアの援助なしにマレーシア国民大学の設立は実現せず、マレーシア語を唯一の公用語として使用する教育制度の実施も無かった。」と明言している。[38]1970 年 12 月には 663 名のマレーシア人学生がインドネシア大学の医学、歯学、技術分野で学ぶため、留学している。

２．６　インドネシア・マレーシア両国の言語の近代化　－　完全インドネシア語綴り

インドネシア国内では NU 学生青年協会（IPPNU）以外は新綴り推進派に耳を貸すようになり、新聞紙上での新綴りに関する論争も次第に下火となっていった。

２．６．１．教育文化相の判断と政策

1971 年から 1972 年にかけ反タマン・ミニ運動などスハルト体制下で最初の学生運動が激化した。[39]一方で新聞には一刻も早い綴りの統一、新綴り決定の必要性を指摘する記事が出るようになった。

『ムルデカ』（*Merdeka*）は民族主義的論調の新聞で、中立系全国紙、『スアラ・カルヤ』（*Suara Karja*）は政府与党ゴルカル系全国紙、『ブリタ・ブアナ』（*Berita Buana*）は中立系全国紙、『プリタ・ミング』（*Pelita Minggu*）はナフダトゥル・ウラマ（NU）の影響下にあるイスラーム系新聞である。

表２　新綴りに関する重要紙の記事（1971 年から 1972 年前半）（点）

新　聞　名	賛　成	中　立	反　対
Sinar Harapan	23		1
Harian Kami	1		
Kompas	20		
Indonesia Raja	19	2	2
Pedoman	1		
Harian Abadi	5		
Nusantara	3		
Merdeka	3		4
Suara Karja	1		
Berita Buana	2		
Pelita Minggu			1

（筆者作成）

これら新綴りを支持する記事の中に今まで使用してきたスワンディ綴りの弱点を指摘し、アラビア語や地方語の綴りの統一はインドネシア語の綴り統一があって始めて可能になるなど、数年前とはまったく異なった意見が多く出、賛成意見が大半を占めるようになった。これはスハルト体制が確立し、情報省の PWI コントロールが強化されたことに起因するとも考えられる。反対意見として、以前と同様の「マレーシア文化の強要は許せない」、「費用がかかる」、「新綴りの習得が困難である」などが『ムルデカ』紙に多少掲載されたが、そのほかは「新綴りの作成に当たり、公正を規して欲しい」といった程度の意見がみられる程度であった。

これらの世論に後押しされ、また学術的に新綴りの必要性が高まる中、マシュリ教育文化相は綴りを統一、決定することはインドネシアの教育向上にとって切り離せないと判断し、教育文化省の重点活動の１つとして新綴りの普及活動を再開した。彼は開発分野において熟練した労働力を得るための開発教育機関設立時（1972 年)、コミュニケーションの手段である標準語となるインドネシア語の必要性を痛切に感じており、また外交面でもインドネシア語は東南アジアに影響を与える言語であることを言明した。

新綴りの普及活動に際し、マシュリ教育文化相は以前のような反対運動が繰り返されることのないように綿密な活動計画を立てた。

マシュリ教育文化相はまず、インドネシア民族の統一語としてインドネシア語を初めて掲げた 1928 年の「青年の誓い」に言及し、マレー語を起源とするインドネシア語の確立、およびその標準化を推し進めインドネシア語の質を向上させる必要がある、というインドネシア語綴りの整備、完成の必要性を説いた。その際言語専門家は政府機関、教育機関を含む主要機関でインドネシア語新綴りが容易に受け入れられるよう、学術的解釈を行う一方で、平明に説明すること、つまり簡単なことを難しく表現するのではなく、難しいことを平明に説明することを心がけた。

また同じマレー語を起源とするマレーシア語を国語とするマレーシアとは対決政策終結後、言語や文化を含む各分野の友好、協力関係を深めることで意見が一致しており、1972 年のプンチャックでのセミナーにおいて両国で統一綴りを作成することが決定された。

２．６．２．プンチャック会議

1972 年 3 月 2，3 日の両日、ボゴール郊外の避暑地プンチャックで教育文化省社会・文化学術局の主催によるインドネシア語セミナーが開催された。このセミナーはインドネシ

ア語育成にとり重要かつ有益な各分野からの意見を聴取するために開かれた。本会議にはアリシャバナ、ハムカ、アスルル・サニ、H.B.ヤシン、モフタール・ルビス、シマンジュンタック、ヨハネスなど、著名な教育者、文化人、文学者、言語学者、新聞記者たち約 70 名が参加した。本セミナーは未だ言語が標準化されず、綴りの統一が見られない現状でインドネシア語の乱れ、混乱が生じている現実に焦点が当てられた。文化用語、科学技術用語となるべきインドネシア語の標準化を直ちに行うことが訴えられ、その中でまず綴りの標準化から着手すべきことが強調された。

一般議題としてシマンジュンタックによる教育分野の言語、アンディ・ハキム・ナスチオンによる科学分野の言語、アワルディン・ジャミンによる公式な場でのコミュニケーション手段としての言語、モフタル･ルビスによるプレスの使用言語の 4 議題が出された。特別議題として「綴り」が提案され、バフルム・ランクティによりアラビア語表記に関する綴り、ヨハネスにより学問分野の用語に関する綴り、ガザリ・ドゥニアにより教育に関する綴り、アムラン・ハリムにより言語発展に関連する綴りが問題として提起され、さらに小グループに分かれこれらの諸問題につき討議された。[40]

アラビア語表記に関する綴りについてはハムカ(作家でジャーナリスト)が座長となり、ヌール・バスリ（カリジョゴ、イスラム教大学)、ズベール・ウスマン（ムハマディア教育大学)、スダルノ（チプタット、イスラム教大学)、H.B.ヤシン（教育文化省言語局、文芸評論家)、シディ・ガザルバ、ハルシャ・バフティアル（インドネシア大学）が討議を行った。学術用語に関する綴りについてはＳ．W．ルジアティ・ムルヤディが中心となりヨハネス、モフタル･ルビス、アンディ・ハキム・ナスチオンと話し合いがなされ、教育に関する綴りについてはマラン教育大学学長のサムスリが座長となりクスナディ・ハルジャスマントリ、アリシャバナ、シマンジュンタックで討議された。言語発展に関連する綴り問題についてはアスルル・サニが中心となり、アリシャバナ、ハジル、ラティフ、フセン・アバスで話し合いが行われた。結論として”c”を”ch”にする（例：cinta→chinta）,アラビア語はすでにインドネシア語になっているのでその綴りはインドネシア語綴りに準ずるなど、1966 年の国家言語研究所（Lembaga Bahasa Nasional）案綴りに一部修正を加え、直ちに綴りの完全化を実施することを決定した。この決定は国語標準化と綴りの完全化に関する政府決定の資料として教育文化省に提出された。

教育文化省は上記会議のほかにも綴りの統一共同作業のためのセミナー、講演会、討論会、シンポジウム、その他の会議の開催など具体的計画を立て、新綴りを社会に浸透させ

る活動を再開するために多くの言語学者を招集した。

完全インドネシア語綴りのコンセプト普及で中心的な役割を果たしたのはマシュリ教育文化相であった。その活動の一環としてマシュリは国民代表議会、内閣、地方政府、主要人物、高等機関等を訪問し、完全インドネシア語綴り実施計画の説明を集中的に行った。この時多くの言語学者や各分野の専門家の協力があった。これら専門家の活動は、1972年5月20日付教育文化相決定書第03/A.I/72号により正式に承認された。[41]

２．６．３．完全インドネシア語綴り実施委員会 [42]

上記決定書に基づき完全インドネシア語綴り実施委員会が同日ジャカルタに発足した。[43]その資料的価値に鑑み、煩をいとわず以下にその概要を紹介しておきたい。

I. 委員会の任務：

１． 完全インドネシア語綴り実施計画の準備

２． 正式発表後の完全インドネシア語綴りの円滑な実施

II. 委員会の構成：

１． 委員長 教育文化省文化総局長

副委員長 教育文化省文化総局秘書

副委員長 国家言語研究所

２． 部門

（1） 書記局

１． アリップ・スバギヨ書記局長（文化総局）

２． スマルシス （文化総局）

３． スタルソ （文化総局）

（2） 言語技術部

１． ルクマン・アリ言語技術部長 （文化総局）

２． S．W．ルジアティ （文化総局）

３． ジョコ・クンチョノ （文化総局）

４． B．スハルディ

５． ハリムルティ・クリダラクサナ （文化総局）

６． S．エフェンディ （文化総局）

７． ダフニル・アドナニ （文化総局）

８．　アムラン・ハリム　（スリウィジャヤ大学）８月２日加入

９．　アントン・ムリオノ　（インドネシア大学）　８月２日加入

１０．ルクマン・ハキム　（国家言語研究所）　８月２日加入

（３）計画部

１．　スオヨ S. アディ計画部長

２．　イドリス･M.T.フタペア　（文化教育省）

３．　M.フシンM

（４）後方支援部

１．　P.ワヨン後方支援部長　（文化総局）

２．　クルニア・ヤフヤ　（書籍小包プロジェクト）

３．　スジョノ　（小学生用書籍小包プロジェクト）

４．　ソフィアン・イスマイル　（文化総局）

（５）啓蒙部

１．　ダルソノ啓蒙部長　（教育文化省）

２．　D．クマルガ

３．　E.シスウォヨ　（情報省）

４．　ワハブ・イスマイル　（情報省）

５．　スラトノ　（教育文化省）

（６）育成部

１．　フアド・サリム育成部長　（教育総局）

２．　クスナディ・ハルジャスマントリ　（教育局）

３．サンプルノ　（芸術教育局）

４．イブヌ・スラメット　（体育青年教育局）

５．T.パサリブ　（教育文化省）

６．ムスタファ　（教育総局）

（７）外交部

１．　シヒテ外交部長　（教育文化省）

２．　M.スジマン　（教育文化省）

３．　T.S.グントヨ　（防衛治安省）

４．　ナハル・シャムスディン　（外務省）

５．　アムロン　　（宗教省）

６．　T.M.パルデデ　　（内務省）

７．　スワルノ　　（内務省）

８．　官房庁代表　　（官房庁）

（８）特別部

１．　ガンジャル・アンカウィジャヤ特別部長

２．　サントサ

３．　パングストゥハディ

４．　A.K.B.P.スパルト

５．　ディディ・ムカハルダント

６．　スセノ・ハルソノ

７．　S.P.スンビリン

本委員会の中で言語技術部は、数回の変更を経て完成した LBK 綴りのコンセプトに基づき、広く社会に普及させる完全インドネシア語綴りのコンセプトを作成する任務を与えられた。彼らはほぼ全員が言語専門家であり、中央政府機関や地方政府を訪問し、完全インドネシア語綴りの重要性を説いた。国民代表議会（DPR）へはルクマン・アリとバスキ・スハルディ、中部ジャワへはムハジールとバスキ・スハルディ、北スマトラと西スマトラへはルクマン・アリとバスキ・スハルディ、スラウェシとバリへはS. W ルジアティ・ムルヤディとジョコ・クンチョノ、ランプンへはジョコ・クンチョノとバスキ・スハルディ、内閣会議へはハリムルティ・クリダラクサナとルクマン・アリが赴いている。

完全インドネシア語綴りの必要性を説く彼らに政治的、金銭的な疑いの目を向けるものもあったが、1972 年 8 月 16 日大統領決定書が出されると、この問題も解決した。

上記 1972 年 8 月 16 日付大統領決定書第 57 号で完全インドネシア語綴りの実施が正式に発表され、この問題も基本的に解決した（施行は独立記念日である翌 17 日から）。

<u>完全インドネシア語綴り：</u>

1. **a**　asah
2. **ai**　pandai, sampai
3. **au**　atau, harimau

4. **b** bahasa, sebab
5. **c** cakap
6. **d** dua, abad
7. **e** emas, pena
8. **f** maaf, fakir
9. **g** guna, tiga
10. **h** hari, tuah
11. **i** isi, simpan
12. **j** jalan
13. **k** kami
14. **kh** tarikh
15. **l** lemas, kesal
16. **m** maka, diam
17. **n** nanti, tuan
18. **ng** ngilu, pening
19 **ny** nyonya
20. **o** oleh, tokoh
21. **oi** amboi
22. **p** pasang, siap
23. **q** Quran
24 **r** raih, putar
25. **s** sampai, lemas
26. **sy** syarat
27. **t** tutup, rapat
28. **u** utuh, pun
29 **v** valuta, universitas
30. **w** wanita, hawa
31. **x** 外来語に使用
32. **y** payung
33. **z** zakat, zeni, lezat

LBK 綴りと完全インドネシア語綴りの相違点：

1. aw → au　例： harimaw → harimau
2. ay → ai　例： panday → pandai
3. oy → oi　例： amboy → amboi

以上の 3 点であるが、LBK 綴りはコンセプトで終わってしまったため一般には普及していなかった。

現在までにコンセプトではなく正式発表されたものは、前述したように 1901 年のファン・オップハイゼン綴り、1947 年のスワンディ綴り、そして 1972 年の完全インドネシア語綴りの 3 種類のみである。それゆえにこの完全インドネシア語綴りが使用される以前は一般国民はスワンディ綴りを使用していた。そこで以下ではスワンディ綴り（旧綴り）と完全インドネシア語綴り（新綴り）の相違点を記述しておく。

1. dj → j　例： djalan → jalan
2. j → y　例： jakin → yakin
3. nj → ny　例： njata → nyata
4. sj → sy　例： sjarat → syarat
5. tj → c　例： tjepat → cepat
6. ch → kh　例： chidmat → khidmat
7. 旧綴りには f、v、z の文字概念がなかったが、新綴りでは f、v、z が加えられた。
8. 旧綴りには q と x がなかったが、新綴りでは q 、 x が学術用語や記号として使用されることになった。
9. 場所を示す前置詞の使い方の変更。

   例：　dikantor → di kantor　（会社で）

   　　kepasar → ke pasar　（市場へ）

ファン・オップハイゼン綴りの oe はスワンディ綴りで u に変更されたが、固有名詞を中心に社会では依然として oe が使用されていた。人名などの例外もあるが、これを新綴りでは改めて u に変えることになった。

新綴りについての大統領決定書第 57 号の公布（1972 年 8 月 16 日）に先立ち、マシュリ教育文化相は 8 月 1 日の閣議で完全インドネシア語綴りの必要性を次のように述べた。「1928 年の青年の誓い〔インドネシアの唯一の国語はインドネシア語である。〕を掲げていく上で、常にインドネシア語の育成を行わねばならず、これにはインドネシア語綴りに

よる専門用語、文法の確立、標準化が基本となる。綴りが一定しない限り用語や文法の規則は成立しないことから、綴りの完全化が最優先実施事項である。インドネシア語の綴りが定まらないと外来語の綴りのインドネシア語化もできず、インドネシア語全体が不安定となる。」(『コンパス』1972 年 8 月 2 日)。

以上のような問題がかねてから指摘されながら一般社会ではインドネシア語の育成は放置され、公式綴りと認められていたスワンディ綴りは社会の中に存在する文字、**f**、**v**、**ch**、**sj** を文字の概念として認めない等、現状にそぐわない状況が続いていた。これらを改め真の国語として通用するインドネシア語を成立させるためにマシュリ教育文化相は、1968 年から 1973 年までのインドネシア語綴り完成を最重要課題として取り組んだ。同相の存在なくして完全インドネシア語綴りの公式化は実現しなかったと考えられ、このことから完全インドネシア語綴りをマシュリ綴りと呼ぶこともある。

第三節　　完全インドネシア語綴り制定後のインドネシア語

1972 年 8 月 16 日の完全インドネシア語綴りの公式発表に先駆け、インドネシア・マレーシア教育協定（1967 年 6 月 27 日発表）の内容を法律的に強化するため、同年 5 月 23 日にマレーシア・インドネシア政府間で会議が開催された。そこで言語、教育に関し共同で作業を行うことの決定が下され、次のような共同声明が発表された。この共同声明は、マレーシアのフセイン･オン教育相とインドネシアのマシュリ教育文化相により行われた。

共同声明　(1972 年 5 月 23 日)

I.　綴り、用語、文法に関する両国語の発展のための共同作業に両国が合意する。

1．完全化した綴りに関する 1967 年 6 月 27 日の両国専門家間で合意した原則を実施する。

2．同時に両国教育相が決定書を通し、上記綴りの実施を正式に公表する。

3. 両国語発展のため共同委員会を設立する。この委員会は両国間で交互に開催地を設定し、協議を行うもので、遅くとも 1972 年 12 月 31 日までに会議を開かねばならない。

4. 両国の著作家の著作権を保護するために著作権共同委員会を設立する。これに

関しても同様に 1972 年 12 月 31 日までに会議を行わねばならない

II. 教育分野の協力関係を発展させるため、両国政府は中等、高等教育レベルの教員、学生/大学生、研究者の派遣を盛り込んだ長期プログラム/計画を作成することに合意する。

III. 教員、研究者派遣に関し、両国は同レベルの現地教員、研究者に対し実施されているのと同条件で実施することに合意する。

IV. 教員、研究者、大学生の派遣に関し、インドネシアは教育文化省、マレーシアは教育省と大学を通し行うことに合意する。

V. 両国政府官僚の経験交換の為、両政府はインドネシア教育文化省とマレーシアの教育省官僚を交代で定期的に相互訪問させることに合意する。

この共同声明を受け、インドネシア語綴り委員会（Panitia Ejaan Bahasa Indonesia）とマレー語常任委員会（Jawatankuasa Tetap Bahasa Malayu）がジャカルタで会議を開き、1972 年 6 月 22 日に下記報告を行った。[44]

I. 前書き

1. 1972 年 5 月 23 日の共同コミュニケを受けインドネシア教育文化省のインドネシア語綴り委員会とマレーシア教育省のマレー語常任委員会の間で下記の目的のため会議が開かれた。

（1）現在までの両国での発展に基づき両国で使用されていた綴りの完全化を実現する。

（2）1967 年 6 月 27 日に、両者が合意した共同綴りに関する決定を再検討する。

（3）言語分野における一般的な諸問題に関する意見を交換する。

2. マレー語常任委員会（スジャク・ビン・ラヒマン委員長、ハッサン・アフマド、アブドゥル・ラーマン・ビン・アルシャド、　カマルディン・ビン・ムハマド、　ジャラル・アフマド・ビン・アブドゥラ)とインドネシア語綴り委員会（ルジアティ・ムルヤディ委員長、ルクマン・アリ, S.エフェンディ, ジョコ・クンチョノ, ハリムルティ・クリダラクサナ, バスキ・スハルディ）による会議が 1972 年 6 月 20－22 日ジャカルタで開かれた。

II.　決定

本会議の決定事項は下記の通りである。

1．　母音　両委員会はインドネシア語、マレーシア語共"a","i", "u", "e", "o"の５文字から成る６音（"e"は２音）を有することに合意する。

2．　子音　両委員会は全子音文字は 1967 年 6 月 27 日の決定通りであることに合意する。

3．　アルファベットの読み方　両国がそれぞれ独自に定めることに合意する。

4．　音節　6 月 27 日の決定通り、音節の型は 13 種類であることに合意する。

5．　派生語の書き方　6 月 27 日の決定通りである。

6．　不変化詞"pun"　"～もまた" という意味で使われる"pun"以外の不変化詞は基語に繋げて書く事に合意。この例外的措置が今後も続けられるか否かを決定するため調査を行う。

7．　人称代名詞所有格、目的格　この語は前/後の語に繋げて書くことに合意する。

8．　複合語　これに関しては多くの問題が生じたため、より詳細に検討するということで合意する。当面は両国が書き方を別々に定める。

9．　句読点　6 月 27 日の決定に全面的に従い、これに省略法を追加する。

III.　その他

1．両国で同義にもかかわらず異なる発音、綴りの語に関し、より詳細にこの問題を調査することで合意する。

例：	マレーシア	インドネシア
	bahawa	bahwa
	beza	beda
	kahwin	kawin
	kerana	karena
	Mac	Maret
	mahu	mau

2. 現在生じている相違を減少させるため、両者は 1967 年 6 月 27 日決定の精神に従い、両国の更なる言語発展努力を重視する。

1972 年 5 月 23 日の共同声明の中のＩ（3）に、1967 年 6 月 26 日の 2 国間の綴りの統一

に関する両国の専門家による合意を受け、言語共同委員会を設立するとの一項があった。両国が同時に完全綴りを発表した後、同年 12 月 26－29 日クアラルンプールで第一回言語会議が開かれ、29 日にインドネシア側のアムラン・ハリムを長とするインドネシア語発展委員会とマレーシア側のスジャク・ビン・ラヒマンを長とするマレーシア語実行委員会から成る共同言語機関であるインドネシア・マレーシア言語審議会（MBIM＝Majelis Bahasa Indonesia-Malaysia）が設立された。このような状況の中インドネシアは、1973 年 5 月インドネシア語発展委員会の綴り・辞書編纂プロジェクトが国家言語研究所（Lembaga Bahasa Nasional）、インドネシア大学文学部、インドネシア科学院（Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia[LIPI]）と協力しインドネシア語一般辞典（*Kamus Umum Bahasa Indonesia*）、 言語・文学協会編纂によるマレー・マレー語辞典（*Kamus Dewan*）を参考に標準インドネシア語綴り辞書の初版本を発行した。

筆者が行った完全インドネシア語綴りに関する1973年から1988年までの新聞記事検索から、完全インドネシア語綴りはインドネシア社会に次第に浸透し、教育レベルの向上に繋がっていることがうかがえるが、他方反対意見として固有名詞、外来語、読み方など、一部不明瞭な点なども指摘されている。これらの諸議論を踏まえ、1975 年に完全インドネシア語綴りの改定版が出された。

完全インドネシア語綴りに関する1973年から1988年までの新聞記事数は下記の通りである。『ピキラン・ラヤット』（*Pikiran Rakyat*）はバンドンの新聞で中立系、『ハルアン』（*Haluan*）、『ワスパダ』（*Waspada*）はともにメダンの地方紙、『パンジ・マシャラカット』（*Panji Masyarakat*）はモハマディア系の雑誌である。

表３　完全インドネシア語綴りに関する重要紙記事（1973－1988）（点）

新　聞　名	賛　成	中　立	反　対
Sinar Harapan	10		2
Kompas	8		3
Indonesia Raya	3		
Berita Yudha	1		1
Merdeka	5		
Suara Karya	2		1
Berita Buana	2		

Pikiran Rakyat	2		3
Angkatan Bersenjata	1		
Haluan	1		
Pelita	1		1
Waspada		1	
Panji Masyarakat	1		
Singgalang	2		

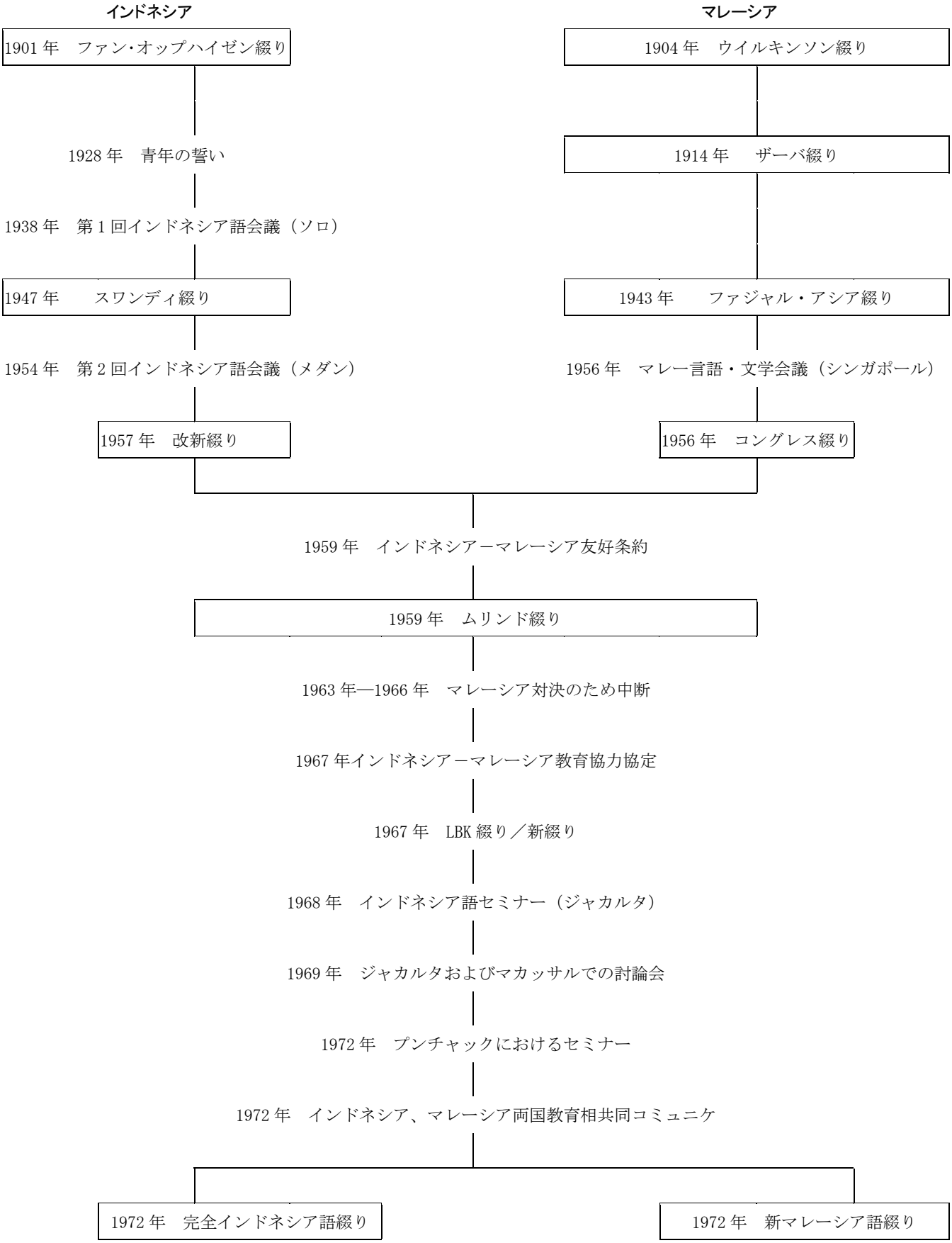
（筆者作成）

各新聞は 8 月 16 日から完全インドネシア語綴りの使用を開始したが、新綴りに慣れていないため多くの間違いが生じた。教育機関においても突然の綴り変更のため学生は困惑した。政府機関でも秘書たちが書類作成に長時間を要するため、綴り変更当初は混乱が生じた（『シナール・ハラパン』1972 年 8 月 22 日）。

国民代表議会の第 9 委員会の委員長ジャマル・アリは綴りの移行期間は同年 8 月 17 日から 12 月 31 日までとし、既存の印刷物に関しては 5 年間の猶予を置き、1978 年には全印刷物を完全インドネシア語綴り版とすると述べた（『シナール・ハラパン』1972 年 8 月 26 日）。こうした中、大学において完全インドネシア語綴り徹底のため言語発展・育成センターの専門家やアリシャバナを招き、セミナーを開催した（『インドネシア・ラヤ』1972 年 9 月 9 日）。また政府、民間企業が言語育成・発展センター(Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa)から専門家を招き、完全インドネシア語綴りの指導を受けるなど、一般社会が新綴りの習得に努めている様子がうかがえる。しかし 1973 年になっても生産企業の登録商標などが新しい綴りに変更されず、政府は 1974 年までに変更するよう指示を出した。これ以外にも道路標識、駅名、政府機関のスタンプなどが旧綴りのままであった。人名に関しても旧綴りのものと新綴りのものが混在した。このような状況を憂慮して国語調査局を設立し、間違いを正し、言語裁判を行うべきであるという意見まで出された（『インドネシア・ラヤ』1973 年 11 月 20 日）。しかしその後の言語育成・発展センター、政府、教育機関などの地道な努力の結果、現在では完全インドネシア語綴りは社会に浸透しており、インドネシア語は近代語としての道を着実に歩み続けている。

以上、本章で検証した複雑多岐にわたる綴りの変遷過程を図式的に整理すると以下の通りとなる。

図３　インドネシアとマレーシアにおける綴りの変遷



（*Ikhtisar Sejarah Ejaan Bahasa Indonesia* に基づき筆者作成）

おわりに

オランダ植民地期の 1901 年から独立後の 1972 年までの間に、インドネシア語の綴りはファン・オップハイゼン綴り（1901 年）、スワンディ綴り（1947 年）、改新綴り（1957 年）、ムリンド綴り（1959 年）、LBK 綴り／インドネシア語新綴り（1966 年）、完全インドネシア語綴り（1972 年）と変遷していったが、公式に発表されたものはファン・オップハイゼン綴り、スワンディ綴り、完全インドネシア語綴りのみで他はコンセプトに止まった。

第二次世界大戦後インドネシアはオランダの再植民地化とそれに対する独立闘争、マレーシア対決など政治的、社会的な混乱が続き、一部の言語学者達の努力にもかかわらず国語としてのインドネシア語の整備には十分な関心が向けられなかった。

また終戦直後、上層部のインドネシア人はオランダ語教育を受けていたためインドネシア語の能力が極端に低く、インドネシア語の教員の質も数もともに不足していた。これらの諸要因により、インドネシア語は近代語としての言語には至らなかった。

しかしながら、初等教育からの学校教育を本格化するためには、整備されたインドネシア語がなければ不可能なこと、また政治、経済、社会的にも円滑なコミュニケーションを欠き、社会が不安定になることが認識されるようになった。とりわけ 1965 年 9 月 30 日事件を契機にスカルノ体制が倒れスハルト政権が成立しマレーシア対決が終了すると、マシュリ教育文化相の指導下でインドネシア語綴りの作成に本腰をいれることになり、1972 年に統一綴りが完成した。

以上言語形成の三大重要事項である綴り、用語、文法のうち綴りの変遷を中心に検証したが、それとの関連で用語についても一言言及しておきたい。各時代の社会状況の変化に伴って新たな用語が生まれたり、既存の用語に新たな意味、価値が付与されることになるが、以下はその具体的な諸例である。

1945-1949　独立戦争の時期でインドネシア人としてのアイデンティティの確立を目指すとともに、他国から承認されねばならない時代。頻繁に使用される単語も当時の社会、政治状況を反映している。

Republik（共和国）、Nica（蘭印民政府）、diplomasi（外交）、perjuangan（闘争）、lasykar（武装部隊）、bung（同志）、rakyat（民衆、人民）、federal（連邦）、kooperator（協力者）、nonkooperator（非協力者）

1950-1959　1950 年インドネシア連邦共和国から単一インドネシア共和国に戻った時代。

kabinet（内閣）、mosi tidak percaya（信任投票は信頼できず）、lisensi istimewa（特別許可書）、pemilihan umum（総選挙）、konstituante（制憲議会）、pusat（中央）、daerah（地方）、berontak（反逆）

1960-1965　資本主義国と共産主義国の冷戦の影響を受けた時代。

revolusi（革命）、politik sebagai panglima（司令官としての政治）、dunia baru（新世界）、masuk kawah Candradimuka(軍隊演習集団入団)、Manipol（1959 年 8 月 17 日スカルノ演説）、kontra revolusi（反革命）、pemimpin besar revolusi（大革命家）、ganyang（粉砕）、nasakom（民主主義、宗教、共産主義＝スカルノ政治体制）、indoktrinasi（教義）、nekolim（新植民地主義）

1966-1998　スハルトによる国家開発の時代。

akselerasi（加速）、tinggal landas（離陸）、pertumbuhan（成長）、teknologi（技術）、modernisasi（近代化）、efisiensi（能率）、kewaspadaan nasional（国民の警戒）、anti pembangunan 反開発）、penataran（研修）、antipancasila（反パンチャシラ）、wawasan nusantara（群島海域構想）、disiplin nasional（国民の規律）、mawas diri（反省）、keterbukaan（開放）、SARA(suku,agama,ras, antargolongan)、kiri baru（新左派）、bersih diri（潔癖）、subvensi（正式援助、助成金）、kecemburuan social（社会不信)、GPK（治安を混乱させる集団）

1998－　スハルト時代以降。

reformasi（改革）、kolusi（共謀）、korupsi（賄賂）、nepotisme（縁故）、krismon（金融危機）、sembako (sembilan bahan pokok),（9 大主要原料）、likuidasi（解散，精算）、rekapitulasi（要約）、konstitusional（憲法上の、合憲の）、inkonstitusional（非合憲の）、provokator（挑発者））

このように時代と共に新用語が形成され、それが言語の多様な発展を推し進める要因となっていくのである。

約言するならば 1972 年以来インドネシア語の発展はめざましく、現在はマレーシア、ブルネイ・ダルサラム、シンガポールも含む広義のマレー語圏で使用されているマレー語（インドネシア語）は制度化されつつあり、近代語の仲間入りを果たし、今後も着実な発展が期待されていると総括できよう。

---

[1] 本章第 2 節を参照。

[2] Harimurti Kridalaksana, *Beberapa Karya Pilihan Tentang Sejarah Bahasa Indonesia,* Jakarta:Fakultas Sastra Indonesia Universitas Indonesia,1982.

[3] 本章では用語、文法については触れない。用語については 5 章を参照。

[4] 現在のインドネシア共和国は 1945 年 8 月 17 日の独立宣言により成立した名称で、それ以前はオランダ領東インド（Nederlandsch－Indië）と呼ばれていた。そのため独立以前には「インドネシア」という名称は正式には使われておらず、「インドネシア語」ではなく「マレー語」と呼ばれていた。本論文中マレーシアのマレー語と区別するため、蘭領東インドの版図内で使用されていたマレー語を便宜上「インドネシア語」と記す。

[5] インドネシア語およびマレーシア語の語源である「マレー語」と区別するため、現在のマレーシア領域内で独立後使用されているマレー語を「マレーシア語」と記す。

[6] Lukman Ali,*Sejarah Ejaan Bahasa Indonesia,* Jakarta:Pusat Bahasa,2000.

[7] Harimurti Kridalaksana ed., *Masa Lampau Bahasa Indonesia:Sebuah Bunga Rampai.* Yogyakarata: Penerbit Kanisius,1991.

[8] Proeve tot Opheldering van de Gronden der Maleische Spelling, Fort Malborough.

[9] Badudu,Yus. *Ejaan Bahasa Indonesia,* Penerbit CV Pustaka Prima,1984.

[10] Soenjono Dardjowidjojo, *Bahasa Nasional Kita,* Penerbit ITB Bandung,1996.
インドネシア語を統一語と定めた時点でジャワ語母語人口は全体の 45%であった。また非マレー語母語者達の反対もなかった。

[11] キ・ハジャル・デワントロ（当時名は Suardhy　Surya　Ningrat）はオランダ植民地下の 1915 年には既に民族団結のためジャワ語ではなくマレー語を各種族間の共通語にしようと提案。これは内的アスペクトであり、13 年後の 1928 年の「青年の誓い」は政治的決定であるので外的アスペクトといえよう。そしてこの 1938 年の第一回会議ではインドネシア語の強化と普及が訴えられたがオランダ語を日常語とする知識階層は関心を示さなかった。しかし 1942 年日本軍によりオランダ語および英語の使用が禁じられ、彼らは初めてインドネシア語習得の必要性を自覚した。つまりこの時、内的、外的両面でインドネシア語が使用されるようになった。同様の視点から見ると 1972 年の完全インドネシア語綴りの作成は内的であるが、マレーシアとの共同作業ということで東南アジアの治安安定への貢献という意味から、また大統領決定ということから政治的意味もあり外的アスペクトともいえよう。

[12] Harimurti Kridalaksana, 1991.op.cit.. p241.

[13] 第 2 回インドネシア語会議については Panitia Penjelenggaraan Bahasa Indonesia, *Kongres Bahasa Indonesia di Kota Medan 28 Okt-2Nop. 1954,* Djawatan Kebudajaan Kem.P.P dan K., 1955.　第 1 回インドネシア語会議については Harimurti Kridalaksana

ed.,*Masa Lampau Bahasa Indonesia:Sebuah Bunga Rampai.* Yogyakarta: Penerbit Kanisius, 1991.P235-269 を参照。

[14] Harimurti Kridalaksana 2003 年 10 月インタビュー。

[15] Lukman Ali ,op.cit..

[16] Umar Junus は 1957 年 6 月 25 日ジャカルタで「インドネシア語とマレー語の綴りの統一の可能性」についての学生との討論会の中で「統 一の可能性は大いにあるが、そのために世界の言語の中の一般的綴りのシステムを研究しなければならない。英蘭からの借用語はたとえ綴りが同一でも／ｖ／，／ｇ／などの音が異なるため簡単には解決できない。」と述べている。

Umar Yunus, *Sedjarah Dan Perkembangan Ke Arah Bahasa Indonesia Dan Bahasa Indonesia,* Bhratara, 1969.

[17] Lukman Ali , op.cit..

[18] 教育文化省 1961. *Pengumuman Bersama Edjaan Bahasa Melaju-Indonesia.*

[19] アリシャバナはインテリ集団のインドネシア社会党に属しており、インドネシア外島の反政府活動に賛同する動きをしたため政府の圧力を受け、1961 年にマレーシアへ出国している。

[20] Alisjahbana S.T.,*Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia I,* Jakarta:Dian Rakjat, 1949

[21] 標準語とは規則的綴りと規則性を持った文法が備わった言語で近代教育の指針となるものである。

Alisjahbana S.T. ,*Dari Perjuangan Dan Pertumbuhan Bahasa Indonesia dan Malaysia Sebagai Bahasa Modern*, Jakarta:Dian Rakyat, 1977.

[22] Asmah Haji Omar（1975 年）によると ñ、ŋ などの文字の非合理性が実現しなかった一要因である。

[23] LBK は Lembaga Bahasa dan Kesusastraan の省略語。言語文学協会と訳す。この機関で作成された綴りなので LBK 綴りと言われる。

[24] この Lembaga Bahasa dan Kesusastraan は後日 Lembaga Bahasa Nasional(国家言語研究所)と名称が変わり、その後言語育成活動の中心となった Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa(言語育成・発展センター)に変わった。2000 年に Pusat Bahasa（言語センター）と名称変更された。LBK はムリンド綴りのコンセプトを刷新するため 1966 年 5 月 7 日に発足した。

[25] Lukman Ali, op.cit..

[26] Abudullah Hussain et al., *Memoranda Angkatan sasterawan '50,* edisi kedua, Petaling Jaya: FajarBakti, 1987.

[27] Komando Operasi Tertinggi の省略形。マレーシア対決時の最高機関であり、その後もあらゆる権限を有していた。

[28] マレーシア語確立のためインドネシアからインドネシア語教員、専門家がマレーシアへ派遣された。マレーシアからの研修生をインドネシアが受け入れ、マレー語教授法について指導を行った。また教科書数が極端に少ないマレーシアにインドネシアは教科書を供与した。

[29] *Sinar Harapan,* February 7 1982.

[30] 『スカルノ自伝：シンディ・アダムスに口述』黒田春海訳　角川書店、1969 年.

[31] Lukman Ali , op.cit..

[32] イスラーム学者が中心となって結成されたイスラーム組織で、1955 年には４大政党の

１つとなった。
[33] Lukman Ali, op.cit..
[34] 1958年Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia(LIPI)でインドネシア語を国際語にすると言う案が出され、インドネシア大学教授 Sarwono,　ガジャマダ大学学長 Sardjito 他７名出席のもと、オランダ語を交えた会議で、サルジトが、今後オランダ語の使用を減少させ、インドネシア語を会議で使用することにしょう。その結果インドネシア語が国際語になるであろう、と述べた。(Arifin Bey 、2003 年 10 月インタビュー)
[35] Harimurti Kridalaksana、 2003 年 10 月インタビュー。
[36] Dendy Sugono ed., *Setengah Abad Kiprah Kebahasaan Dan Kesastraan Indonesia 1947-1997,* Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, 1998.
[37] Kunaseelan et al., *Hubungan Malaysia Indonesia 1957-1970,* Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka,1996.
[38] *Ibid.*
[39] 増田与、後藤乾一、村井吉敬　『現代インドネシアの社会と文化』現代アジア出版会、1979.　第 2、第 3 章を参照。タマン・ミニ運動とはスハルト大統領（当時）夫人が地方政府、民間企業、外国系企業および国家予算から巨額の資金を集めミニチュアインドネシアを建設することに対する反対運動であり、体制側と知識人の関係が断ち切れた象徴的出来事である。
[40] プンチャック会議についてはプンチャク会議議事録(H.B. ヤシン文学館所蔵)を参照。
[41] Lukman Ali, *Ikhtisar Sejarah Ejaan Bahasa Indonesia,* Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, 1998.
[42] Lukman Ali, 2000.op.cit., P186-188
[43] 以下の記述は 1972 年 5 月 20 日付教育文化相決定書第 03/A.I/72 を参照。
[44] Dewan Bahasa dan Pustaka Brunei, *Persidangan dan Keputusan 1972-1997,* Dewan Bahasa dan Pustakan Brunei,1998.